

高齢者ケアサービス論

担当教員 生野 繁子

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

1. 変化する日本の高齢者ケアサービスのあり方を再確認し、看護福祉・健康支援の課題を探る。
2. 少子高齢社会と人口減少の進展に伴う地域包括ケアシステムと、高齢者ケアサービスのあり方を展望する。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	導入 授業計画の説明・日程調整・履修学生の自己紹介・高齢者ケアサービスに関する経験など
2	ケア関連領域での高齢者ケアに関する教育の変遷
3	国が進める地域包括ケア
4	介護保険法の理念・各国の制度の概観
5	介護保険法の概要・改正点
6	介護保険法によるケアサービス
7	老人福祉法によるケアサービス
8	自治体の高齢者ケアサービス
9	地域密着・小規模多機能高齢者ケアサービス
10	高齢者ケアサービスを支える財源
11	公的年金制度と高齢者の生活
12	介護保険制度による小規模多機能施設見学研修
13	自治体サービスによるグループホーム見学研修
14	ケア実践者のNPO法人によるデイサービス等の施設見学研修
15	高齢者ケアサービスにおける看護福祉・健康支援の課題についてディスカッション

【履修上の注意事項】

1. 履修者数により、講義の展開順序に変化もありうる。
2. 履修する院生はそれぞれのテーマに沿ってレジュメやレポートを作成し、ディスカッションする。
3. 施設見学研修は履修登録確定後に日程調整する。

【評価方法】

提出レポート50%、発言内容50%の割合で総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献】

1. 最新版「高齢社会白書」「介護六法」「社会福祉六法」等。
2. 他、必要時に随時紹介する。

ヘルスケアシステム論

担当教員 徳永 淳也

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

国民医療費の高騰と情報化の推進などを背景として、保健・医療・福祉サービスは複雑化、高度化が顕著であり、医療（健康）情報の共有とサービスの質的保証の重要性が再認識されている。本論では、ヘルスサービスの各領域における質的保証と情報管理に関する具体的な課題提示から出発し、それらの背景にある特徴的な問題理解のための視点を欧米の先行研究レビューを踏まえて明らかにする。

【授業の展開計画】

質評価の重要なアウトカム指標である顧客満足、提供者の職務満足等のサービスの各種評価指標や業務ストレス、組織文化等の質に直接影響をおよぼすとされている指標に関して、グループ討議や論文抄読等を通じて理解を深め、実践的問題解決能力を習得する。講義は、概ね以下の内容に沿いながら進められるが、当該内容に関する研究論文の発表を通じて、批判的な研究評価法等についても習得をめざす。

1. 医療と社会、医療システムの評価
2. 医療小史と法制度からみた医療システム
3. 医療と経済、市場機構
4. 供給者誘発需要と代理関係
5. 保険の理論と健康保険
6. 産業としての医療
7. 医療の経済的評価
8. 医療における質評価と管理
9. 研究事例1: 医療の質評価とは
10. 研究事例2: 職務満足度と患者満足度-職種、職階、疾病による特徴-
11. 研究事例3: 医療従事者の職務環境と患者アウトカムの関連
12. 研究事例4: 医療の質は患者アウトカムに影響を与えるか
13. 研究事例5: 医療保険支払い方式が患者アウトカムに与える影響
14. 研究事例6: 医療従事者のマンパワー充足と医療の質
15. 研究事例7: 医療施設の組織風土が医療の質におよぼす影響

【履修上の注意事項】

講義は、提供されたトピックスについての議論を中心に進めるので、問題意識を持って講義に望むこと。また、課された論文についての発表を行わなければ単位は認められないので注意すること。

【評価方法】

論文発表50%、講義中のディスカッション50%の割合で評価する。

【テキスト】

講義中に適宜紹介する。

【参考文献】

講義中に適宜紹介する。

医療統計学

担当教員 森 信之

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

本講義では、実際の事例に即した演習を取り入れながら、看護・福祉分野における統計学の基礎知識と各種手法を習得し、それぞれの専門分野における調査研究や、現場での実務作業を遂行する上で、得られたデータを統計学的手法を用いて分析できるようになることを目的とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	統計学と確率論
2	記述統計, 各種統計量の定義
3	正規分布, t分布, χ^2 乗分布, F分布
4	標本調査と母集団, 点推定と区間推定
5	検定の考え方, 2種類の過誤, サンプルサイズ
6	2つの平均値の差の検定 (t検定)
7	ノンパラメトリック検定 (順位和検定・符号検定)
8	比率の検定 (対応あり, 対応なし), オッズ比
9	適合度の検定, 独立性の検定
10	残差分析, マクネマー検定
11	分散分析と多重比較
12	相関関係と相関係数, 回帰分析
13	重回帰分析
14	ロジスティック回帰
15	総合演習

【履修上の注意事項】

テキストがないので、講義の内容を事前に予習しておくこと。また、演習問題を中心に復習をし、考え方のプロセスを理解すること。わからないことは質問するなどして、早めに解決しておくこと。

【評価方法】

統計処理の演習のレポートを課し、適切な統計手法が選ばれているか、結果の判断は適切か、結果をわかりやすくまとめて表現できているか、などを実践的に評価する。

【テキスト】

テキストは使わず、適宜プリントを配布する。

【参考文献】

必要に応じ、講義中に紹介する。

応用倫理学

担当教員 未定

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

人間の健康と不健康、正常と異常、見守りと介入などにおいて、その境界における倫理的判断の感覚の形成を目指します。そのキー概念として「作為と不作為」を正面に提示し、この視点から、いかなる時点でどのように「介入」すべきか、それとも「放置」の形態を取り、当事者の「気づき」を待ちつつ「見守る」か——ハンセン病当事者の聞き書きを重ねて「質的な研究法」を習得し、倫理に関わる問題発見と解決法のセンスを磨きます。

【授業の展開計画】

本学社会福祉学科主催による「第1回 公開学術シンポジウム 薬害エイズとハンセン病問題がこれからの看護・福祉に問いかけるもの」（2003年12月）に端を発した著作『ハンセン病・薬害問題 プロジェクト 作為・不作為へ』（山本務・熱田一信編、本の泉社、2007年）を共通テキストとする。また、現下の日本の諸現実に対して、「作為と不作為」という概念枠によって初めて見えてくる諸出来事を手繰り寄せ持続的にフォローし、その当事者に対する精神的な支援の可能性を追求する。

これとともに、応用倫理学の観点から、ドイツの研究書などを拙訳（未発表）によって原理的に、かつ体系的に追求した成果を摂取する。

聴講者による要約報告を中心としてすすめてゆく予定であるが、聴講者の理解程度に即したものとしたい。また、本学学部社会福祉学科による公開授業「社会福祉特講Ⅰ」で「当事者」（生命と生活の危機と人権侵害の危機に晒され、周章狼狽し、混乱を来たした人生から社会的な支援を訴え、社会的な承認闘争に立ち上がった人）による「語り」をよく聴き取る機会を設けているので、この科目の受講が望ましい。

【履修上の注意事項】

物事を言葉によって原理的に考え抜く持続性と集中性と意欲を求める。

【評価方法】

授業中の報告＝50点、レポート＝50点。

【テキスト】

山本 務、熱田一信編『ハンセン病・薬害問題 プロジェクト 作為・不作為へ』（本の泉社、2012年初版・第2刷）

【参考文献】

演習中、適宜提示。

健康医科学

担当教員 ○掃本 誠治、樋口 マキエ、加藤 浩、未定、永田 俊明、平崎 和雄、
二塚 信、永田 憲行

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

- (1) 将来「医学」「健康」をキーワードにした有能な高度専門スタッフの育成を目指し、健康科学、医科学、臨床医学全般についての基礎的知識を修得し、健康、医学、そして人間とは何かについて理解できる。
- (2) 健康科学、医科学領域での研究を推進するために必要な科学的裏付けを得るための基礎的研究手法を理解し、大学院生として必要な問題意識を持って情報収集、情報分析、そして新知見を発見できる能力を身につけることができる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	
1	ガイダンス、医学概論・生命倫理	(掃本)
2	医科学研究概論①(疫学入門)	(二塚)
3	医科学研究概論②(遺伝薬理学入門)	(掃本)
4	医科学研究概論③(遺伝・環境要因と疾患入門)	(掃本)
5	医科学研究概論④(薬物治療学入門)	(樋口)
6	医科学研究概論⑤(東洋医学入門)	(未定)
7	人間機能・形態学入門①(人体の構造と機能)	(永田憲)
8	人間機能・形態学入門②(心臓の構造と機能)	(掃本)
9	人間こころ心理学概論	(永田俊)
10	人間疾病・治療学概論(免疫学入門)	(掃本)
11	健康科学概論①(人間スポーツ科学)	(平崎)
12	健康科学概論②(筋機能科学—身体不活動の影響)	(加藤)
13	臨床医科学概論①(小児科学、障害者教育)	(永田憲)
14	臨床医科学概論②(内科学)	(掃本)
15	臨床医科学概論③(生活習慣病と疾患)	(掃本)

【履修上の注意事項】

各院生の受講可能な曜日、時刻を調整し、授業日を決める。

【評価方法】

討論(50%)、レポート内容(50%)により総合的に評価する。

【テキスト】

複数の分野にわたる講義なのでテキストは使用しない。必要に応じプリントを配布する。

【参考文献】

必要に応じ、適時紹介する。

精神保健臨床論

担当教員 ○茶屋道 拓哉、野田 隆峰、木村 義則、藤瀬 昇、福田 洋子、和田 冬樹

配当年次 1年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考 平成28年度より「心身医学論」から「精神保健臨床論」へ科目名変更。

【授業のねらい】

裾野の広い精神保健学的視座を養うと同時に、メンタルヘルスに関するトピック等から臨床実践例に触れる機会を準備する。本講義を通じ、院生自身の関心のあるメンタルヘルス現象をバイオ・サイコ・ソーシャルを含む多角的視点から捉えられるようになる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	精神医学総論（野田）
2	統合失調症（野田）
3	老人の精神疾患（野田）
4	摂食障害・神経症・心身症（野田）
5	パーソナリティ障害（野田）
6	身体疾患による精神疾患・リエゾン（野田）
7	小児・思春期の精神疾患（木村）
8	感情障害・自殺関連（藤瀬）
9	アルコール・薬物依存（和田）
10	臨床心理カウンセリング総論（福田）
11	臨床心理カウンセリング症例（福田）
12	現代社会における精神保健の諸問題（茶屋道）
13	心の健康と精神科ソーシャルワーク（茶屋道）
14	いじめ・ひきこもり・不登校へのソーシャルワーク（茶屋道）
15	メンタルヘルス課題におけるチーム医療（茶屋道）

【履修上の注意事項】

院生は主体的に講義に参加し、日常的に問題意識を持ち活発な質疑により学習内容を深めるよう努力すること。特に自身の修士論文テーマと、毎回の講義テーマを関連づけて、問題意識や事前学習を深めて講義に参加するとともに、講義後の振り返りを行うこと。

【評価方法】

授業中のレスポンス（主体的な発言とディスカッションの内容や深まり）30%
レポート70%

【テキスト】

特に使用しない。必要に応じて資料を準備する。

【参考文献】

授業の中で適宜指示をする。

健康支援科学通論

担当教員 ○加藤 浩、生野 繁子、福本 久美子、山本 恵子、石川 裕子、金子 憲章、川俣 幹雄、徳永 淳也、塚本 紀之、二宮 省悟、内田 匠治

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 必修

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考 当該科目については4ページにわたり記載している。(1/4)

【授業のねらい】

世界保健機関（WHO）は「健康」について次のように定義している。「Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.」つまり、健康とは「疾病または病弱でないということだけではなく、肉体的、精神的ならびに社会的にも完全に良好な状態」を指す。

【授業の展開計画】

[総論]

1. 加藤 浩：テーマ【健康支援科学の学問的背景】

キーワード：健康，健康支援，ヘルスプロモーション

概要：健康支援科学通論は、「健康寿命」と「ヘルスプロモーション」の概念をベースに「身体のケア」及び「心のケア」，および「身体のケア」の側面から，対象者の健康支援に関わるための多職種相互理解と連携強化を目指す基盤科目である。健康支援科学専攻設置の趣旨とその社会的意義について概説する。

2. 川俣 幹雄：テーマ【健康支援のための介入法と効果検証】

キーワード：介入法，EBM，メタ・アナリシス

概要：公衆衛生学的な視点から見た健康支援のための代表的な2つの介入法（ポピュレーション・アプローチとハイリスク・アプローチ）について学ぶ。さらに介入後の効果検証について，EBMの概念とそれを導き出すための基礎的統計手法（オッズ比，相対リスク比，メタ・アナリシス等）について学ぶ。

[各論]

3. 生野 繁子：テーマ【ケアとジェンダー】

キーワード：ジェンダー，ケア，男女共同参画社会

概要：古来、人々の営みはジェンダーと大きく関わっている。現代社会のジェンダー視点と男女共同参画の現状を概説し、具体的に暮らしの中のあり方とケアに関するジェンダーの影響を考察する。

【履修上の注意事項】

健康支援科学の学問的背景，学問領域について学ぶための極めて重要な科目の1つであるため，講義中の積極的な討議や意見交換を期待する。

【評価方法】

各講義の後のレポート（100%）で評価する。

【テキスト】

講義中に配布する。

【参考文献】

適宜，紹介する。

健康支援科学通論

担当教員 ○加藤 浩、生野 繁子、福本 久美子、山本 恵子、石川 裕子、金子 憲章、川俣 幹雄、徳永 淳也、塚本 紀之、二宮 省悟、内田 匠治

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 必修

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考 当該科目は4ページにわたり記載している。(2/4)

【授業のねらい】

つまり、健康とは①身体機能、②精神機能、そして③社会福祉の3つの要素を有機的に連携したものである。そして、本学の医療・福祉の専門職養成大学の特性を加味すれば、健康支援とは医療的アプローチ（医学、理学療法学、鍼灸学、口腔保健学、看護学）と社会科学的アプローチ（社会福祉学、心理学）の両側面を基盤とした複合科学として位置づけることが出来る。

【授業の展開計画】

[各論]

4. 生野 繁子：テーマ【ジェンダー視点からの介護予防と介護者の健康支援】

キーワード：ジェンダー、介護予防、介護者支援

概要：高齢者が地域においてQOLを保ち自分らしく過ごすために、自分自身の介護予防と、要支援要介護者及び家族介護者の健康支援は重要な課題である。要支援要介護の原因疾患の性差、介護する男性の増加に伴う介護者支援の現状と課題を教授し、健康な生活と家族支援についてジェンダー視点から考察する。

5. 福本 久美子：テーマ【働く女性の健康支援】

キーワード：労働の質、ヘルスプロモーション、ソーシャルキャピタル

概要：女性のライフスタイルの特徴から過度なダイエットによる健康リスク、女性特有のガン、更年期障害や閉経後の循環器疾患等、様々な健康課題が存在する。超高齢社会にむけ、女性の労働力は重要な資源である。働く女性が労働の質を高め健康な暮らしを送るためには、個人のライフスタイルの改善のみならず、健康的な社会環境の整備を図ることが重要である。働く女性の健康課題とその支援の実態について、ヘルスプロモーションとソーシャルキャピタルの視点から実践事例と研究成果について教授する。

6. 山本 恵子：テーマ【看護学領域からみた転倒予防と健康支援】

キーワード：転倒予防、高齢者、認知症

概要：高齢者の転倒の9割が生活の場で起きている。高齢者の生活の場は、自宅のみならず施設など多様化し、健康レベルも自立から要介護者、認知症まで様々である。本講義では、多様な背景をもつ高齢者への転倒予防の実際と課題について教授し、認知症を含めた支援について、議論を通して考察する。

7. 加藤 浩：テーマ【理学療法領域からみた転倒予防と健康支援】

キーワード：転倒予防、生活機能トレーニング

概要：先進国を中心に高齢化社会を迎え、高齢者の転倒は、生活機能の低下に直結し、医療・社会的に極めて重要な問題となっている。転倒の内因性リスク因子としては、バランス障害、筋力低下、視力障害などが挙げられ、これら身体機能レベルに対する理学療法戦略の有効性について最新のエビデンスを提示しながら教授する。

【履修上の注意事項】

健康支援科学の学問的背景、学問領域について学ぶための極めて重要な科目の1つであるため、講義中の積極的な討議や意見交換を期待する。

【評価方法】

各講義の後のレポート（100%）で評価する。

【テキスト】

講義中に配布する。

【参考文献】

適宜、紹介する。

健康支援科学通論

担当教員 ○加藤 浩、生野 繁子、福本 久美子、山本 恵子、石川 裕子、金子 憲章、川俣 幹雄、徳永 淳也、塚本 紀之、二宮 省悟、内田 匠治

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 必修

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考 当該科目は4ページにわたり記載している。(4/4)

【授業のねらい】

そこで当該授業は大きく2段構成とする。まず、第1～2回目はヘルスプロモーションの視点からとらえた健康について講義し、健康支援科学の学問的背景及びその研究対象領域の概説を教授し全体像の把握を図る。次に第3回目以降の講義からは、より専門的視点から健康支援科学についての各論を展開し、医療と福祉の有機的連携の必要性を学ぶ。そして、これら知識を臨床場面で実践応用できるようになる。

【授業の展開計画】

12. 内田 匠治：テーマ【東洋医学からみた「こころ」の健康支援】

キーワード：心身一如、氣、鍼灸、漢方

概要：東洋医学では身体が切り離せないもの（心身一如）という考え方がある。また精神活動と身体活動の両面にまたがって作用する「氣」という上位概念があり、こころという無形のものに対して、身体を介して治療するという発想がある。それらが、鍼灸・漢方臨床としてどのように実践されているか実例を交えながら東洋的な「こころの健康」観について教授する。

13. 徳永 淳也：テーマ【口腔保健学的接近と健康支援科学の展開】

キーワード：口腔保健学、社会疫学

概要：口腔保健に関する疾患分布、食行動や健康観等の諸相やその口腔保健学的捉え方について、社会で生活する人間という視点から理解することの重要性を先行研究を踏まえて説明し、健康支援科学としての口腔保健学的接近の社会的意義について考察する。

14. 金子 憲章：テーマ【う蝕・歯周病予防の健康支援】

キーワード：う蝕、う蝕、生活習慣病、歯周病原性細菌、炎症性サイトカイン

概要：う蝕を予防する方法を教授し、歯髄、根尖性組織への波及を防止する。また、生活習慣病としての歯周病の定義を理解し、歯周病の原因である歯周病原性細菌の直接的障害作用や歯周組織内で産生された炎症性サイトカインによる肥満・糖尿病、心血管疾患、出産、呼吸器疾患への影響を分子生物学的に教授し、う蝕・歯周病予防による健康支援を考察する。

15. 石川 裕子：テーマ【口腔機能と栄養からみた健康支援】

キーワード：口腔機能、栄養、食生活

概要：口腔には、食べる、話す、表情をつくる、栄養摂取など多くの機能があり、歯や唾液の数や量が変わることによって色々な弊害を伴う。口腔の各機能を概説し、歯と栄養摂取、歯数と死亡率などの関係について書かれた論文を紹介したうえで、個人および職種としてできる「口腔機能と栄養からみた健康支援」について考察する。

【履修上の注意事項】

健康支援科学の学問的背景、学問領域について学ぶための極めて重要な科目の1つであるため、講義中の積極的な討議や意見交換を期待する。

【評価方法】

各講義の後のレポート（100%）で評価する。

【テキスト】

講義中に配布する。

【参考文献】

適宜、紹介する。

健康支援科学通論

担当教員 ○加藤 浩、生野 繁子、福本 久美子、山本 恵子、石川 裕子、金子 憲章、川俣 幹雄、徳永 淳也、塚本 紀之、二宮 省悟、内田 匠治

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 必修

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考 当該科目は4ページにわたり記載している。(3/4)

【授業のねらい】

また、近年、本邦で策定された「新健康フロンティア戦略－健康国家への挑戦－」では、具体的アクションプランが提示されており、その中でも「歯や口腔の健康」、「メタボリックシンドローム対策」、「転倒予防」、「介護予防」、「疾病予防」、「女性の健康」、「こころの健康」、「食の選択」、「スポーツ振興」、「子供の健康」などは重要なキーワードとして位置づけられている。

【授業の展開計画】

8. 二宮 省悟：テーマ【高齢者スポーツと健康支援】

キーワード：高齢者スポーツ、トレーニング効果

概要：健康増進の1つとして、スポーツ活動に取り組む高齢者は年々増加し、さらにその活動内容も多様化している。それに伴いスポーツ傷害に対する医療ニーズも高まってきている。傷害予防のために高齢者の身体機能を如何に向上させるかが重要課題である。高齢者の身体トレーナビリティについて生理機能側面から最新のエビデンスを提示しながら教授する。

9. 川俣 幹雄：テーマ【がん予防と健康支援】

キーワード：がん予防、生活習慣

概要：がんは、1981年からの約30年間日本における死亡原因の第1位であり、総死亡の約30%を占めている。がんは難治性の疾患であるが、一部のがんは、予防可能であることが様々な疫学的研究によって示されている。本講義では、①がんのリスクファクター、②日本と欧米におけるがんの疫学的相違、③生活習慣とがんの予防戦略、④1次予防と2次予防などについて教授する。

10. 塚本 紀之：テーマ【鍼灸と免疫～東洋医学からみた感染症予防への健康支援～】

キーワード：未病、免疫、神経、リンパ球、サイトカイン

概要：鍼灸による免疫調節の基礎となる神経系による免疫調節についての最近のトピックスを中心に、東洋医学の古典にみられる免疫の概念なども解説しながら、鍼灸による感染症予防への健康支援について教授する。

11. 内田 匠治：テーマ【鍼灸学（東洋医学）からみた介護予防】

キーワード：経絡、気功、ロコモティブシンドローム

概要：運動器の障害による要介護の状態や要介護リスクの高い状態を示す「ロコモティブシンドローム」の対策として推奨される運動と東洋的な身体訓練法（気功・太極拳など）を比較しながら、伝統的な身体技法の介護予防に対する有用性について考察する。さらに東洋的な身体観に基づく経絡や経穴を用いた運動器への介入が介護予防に有用であるということについても実例を示しながら教授する。

【履修上の注意事項】

健康支援科学の学問的背景、学問領域について学ぶための極めて重要な科目の1つであるため、講義中の積極的な討議や意見交換を期待する。

【評価方法】

各講義の後のレポート（100%）で評価する。

【テキスト】

講義中に配布する。

【参考文献】

適宜、紹介する。

ヘルスプロモーション論

担当教員 未定

配当年次 1年

単位区分 選択

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

健康課題の変化とそれに対応する健康概念およびヘルスプロモーション理念の発展と動向を理解し、実際の活動状況を具体的資料を基に把握してヘルスプロモーションアプローチの重要性および多様性について理解する。

【授業の展開計画】

健康は、種々の要因によってその保持や増進、阻害などが規定される。近年においては、ライフスタイルの多様化に伴う生活習慣病や高齢化に伴う認知症、高度ストレス社会の結果としての精神障害等が著しく増加している。EBMに基づくヘルスプロモーション研究も非常に進展しており、健康阻害のリスクファクターもかなり明確化されてきている。さらにそれらに対応する社会科学的・政策的健康増進対策も進み、包括的な予防や増進の視点からヘルスプロモーションアプローチの重要性が高まっており、具体的な活動も世界各地で展開されてきている。そこで、本講義では、主として以下の内容について教授する。

- ① 健康概念、健康の決定要素およびヘルスプロモーション概念について
- ② 効果的なヘルスプロモーションアプローチの計画、実践、評価、媒体、EBMの視点について
- ③ アラマ・アタ宣言およびオタワ憲章以後のヘルスプロモーション国際会議の主要な論点について
- ④ 欧米のヘルスプロモーション施策および健康教育の推移や考え方について
- ⑤ 欧米以外のヘルスプロモーション施策および健康教育の推移や考え方、および欧米との異同について
- ⑥ 精神保健に関わる特異な健康問題へのヘルスプロモーションアプローチについて
- ⑦ ヘルスプロモーションの対象課題ごとの取り組み状況とその考え方について
- ⑧ 健康都市づくり運動の内容と進展について
- ⑨ わが国における健康日本21やアメリカのHealthy People等の各国の健康増進施策の特徴と課題について

【履修上の注意事項】

講義形式と演習形式のミックスで行う。

【評価方法】

講義中の意見や質問を重視する。また、全員にレポートを課する。講義態度20%、レポート80%とする。

【テキスト】

特定のテキストは使用しない。必要に応じて資料を配布する。

【参考文献】

講義の中で指示する。

精神保健アセスメント論

担当教員 永田 俊明

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

精神保健におけるアセスメントはクライアントの可能性を探るために行われるものである。能動的機能と受動的機能の相補性を理解し、非構造化面接から質問紙法にいたる臨床心理アセスメント技法の修得とスーパーバイズを通じたカウンセリング技法の修得を行う。

【授業の展開計画】

1. パーソナリティ領域：「 行動 」に関するアセスメント
2. パーソナリティ領域：「 認知 」に関するアセスメント
3. パーソナリティ領域：「 発達・知能 」に関するアセスメント
4. パーソナリティ領域：「 性格 」に関するアセスメント
5. パーソナリティ領域：「 人格障害 」に関するアセスメント
6. パーソナリティ領域：「 精神障害 」に関するアセスメント
7. 非構造化面接法
8. 半構造化面接法
9. 構造化面接法Ⅰ
10. 構造化面接法Ⅱ
11. 構造化面接法Ⅲ
12. 質問紙法Ⅰ
13. 質問紙法Ⅱ
14. カウンセリング技法Ⅰ
15. カウンセリング技法Ⅱ

【履修上の注意事項】

事前にアセスメントツールについて学習し、授業実施後は実践で活かせるようアセスメント方法について復習すること。

【評価方法】

レポート60%及び報告40%により総合評価

【テキスト】

使用せず。

【参考文献】

質問紙法等の検査実施に伴うマニュアル等は随時資料として配布する。

口腔疾患病態論

担当教員 金子 憲章

配当年次 1年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

口腔疾患では齲蝕と歯周病が2大疾患であり、その発症原因、病態、対処法は最も重要と考えられるが、それら以外にも口腔に発症する疾患は多く存在し、硬組織疾患、口腔粘膜疾患、顎骨および顎骨内に原発する疾患があり、さらに他の臓器に原発した疾患の症状が口腔内に出現することもある。これらの口腔疾患の発症の原因、病態を総合的に説明できる。また、特に歯周病については、歯周病が全身に及ぼす影響を分子生物学的に説明できる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	顎顔面の発生、歯の発生・萌出
2	歯の発育異常、歯の萌出異常
3	硬組織疾患
4	歯髄・根尖歯周組織疾患
5	歯周疾患
6	顎顔面の異常
7	顎骨疾患（顎関節疾患も含む）
8	唾液腺疾患
9	粘膜疾患
10	神経性病変
11	口腔領域外原発疾患1
12	口腔領域外原発疾患2
13	歯周病と冠動脈疾患、心内膜炎、誤嚥性肺炎との分子生物学的関連
14	歯周病と肥満、糖尿病との分子生物学的関連
15	歯周病と早産・低体重児出産、骨粗鬆症との分子生物学的関連

【履修上の注意事項】

各種口腔内疾患の原因・症状等について、教科書、文献等を調べて発表してもらう。それについてディスカッションを行う。

【評価方法】

講義中の質疑応答60%、発表・レポート40%

【テキスト】

なし

【参考文献】

適時必要な教科書、文献等を紹介する。

口腔疾患予防基礎論

担当教員 北田 勝浩

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

口腔という特殊な環境を学び、う蝕および歯周病を中心に、不正咬合、口臭症、口腔乾燥症など主な口腔疾患の病因・病態および予防法について体系的に理解し、これらの口腔疾患と全身疾患との関連について理解を深める。以上をとおして、口腔保健を通じた支援により、健康の向上に寄与できる能力を養う。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	口腔環境の特徴
2	う蝕の病因・病態
3	う蝕のリスク検査
4	う蝕の予防法
5	歯周病の病因・病態
6	歯周病の予防法
7	不正咬合の病因・病態
8	不正咬合の予防法
9	口臭症の病因・病態，口臭検査
10	口臭症の予防法
11	口腔乾燥症の病因・病態，検査，予防法
12	口腔疾患と全身疾患との関連（細菌性心内膜炎）
13	口腔疾患と全身疾患との関連（誤嚥性肺炎）
14	口腔疾患と全身疾患との関連（早期・低体重児出産）
15	口腔疾患と全身疾患との関連（糖尿病）

【履修上の注意事項】

各回のテーマに沿って、履修生の輪番によるプレゼンテーションを行い、全員で討論する。

【評価方法】

レポート等の日常的学習成果（20%），討論への参加（40%），プレゼンテーション（準備・発表）（40%）を総合して評価する。

【テキスト】

指定しない。講義の中で適宜紹介する。

【参考文献】

講義の中で適宜紹介する。

表面筋電図計測・解析論

担当教員 加藤 浩

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 講義

単位数 4

【授業のねらい】

身体機能支援科学分野に関する定量的評価と科学的介入方法の確立をめざして、臨床現場で実施する計測の①目的、②生体計測の難しさ、③生体計測を実施するための臨床的思考過程について講義を実施する。具体的には、振

幅情報に注目した①積分筋電図解析や、周波数情報に注目した②周波数パワースペクトル解析について講義を行う。そして、表面筋電図計測を理解しその知識と技術を臨床応用できるようになる。

【授業の展開計画】

週	授業の内容	週	授業の内容
1	生体計測の目的	16	IEMG解析（股関節周囲筋）とその評価
2	生体計測の難しさ	17	IEMG解析（膝関節周囲筋）とその評価
3	生体計測実施の臨床思考過程	18	IEMG解析（足関節周囲筋）とその評価
4	表面筋電図とは	19	IEMG解析（体幹筋）とその評価
5	銀塩化銀電極とインピーダンス	20	反応時間解析（股関節周囲筋）とその評価
6	EMGケーブル（単極誘導と双極誘導）	21	反応時間解析（膝関節周囲筋）とその評価
7	生体信号アンプ（差動アンプとCMRR）	22	反応時間解析（足関節周囲筋）とその評価
8	生体信号アンプ（時定数と感度）	23	反応時間解析（体幹筋）とその評価
9	EMG（キャリブレーション）	24	連続wavelet解析（股関節周囲筋の評価）
10	IEMG解析（移動平均法とRMS法）	25	連続wavelet解析（膝関節周囲筋の評価）
11	時間と周波数の不確定性原理	26	連続wavelet解析（足関節周囲筋の評価）
12	定常信号解析（高速フーリエ変換）	27	連続wavelet解析（体幹筋の評価）
13	定常信号解析（短時間高速フーリエ変換）	28	離散wavelet解析（股関節周囲筋の評価）
14	非定常信号解析（連続wavelet変換）	29	離散wavelet解析（膝関節周囲筋の評価）
15	非定常信号解析（離散wavelet変換）	30	離散wavelet解析（足関節周囲筋の評価）

【履修上の注意事項】

臨床への応用を常に意識しながら、参考文献等の予習と講義内容の復習を行うこと。

【評価方法】

レポート（100%）で評価する。

【テキスト】

講義中に配布する。

【参考文献】

『計測法入門 計り方・計る意味』内山靖・他 協同医書出版 2001年
『表面筋電図』バイオメカニズム学会編 東京電気大学出版局 2006年

表面筋電図計測・解析論

担当教員 二宮 省悟

配当年次 1年

開講時期 通年

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

臨床現場で実施する計測の目的、生体計測の難しさ、生体計測を実施するための臨床的思考過程について講義を実施する。具体的には、表面筋電計の計測とその準備、処理と解析、応用の事例、適応とその限界について講義を行う。そして、表面筋電図計測を理解し、その知識と技術を臨床応用できる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	表面筋電図とは（筋収縮のメカニズム）	16	処理と解析（移動平均法とRMS法）
2	表面筋電図とは（筋電位の発生メカニズム）	17	処理と解析（平均振幅）
3	表面筋電図とは（筋活動を捉える）	18	処理と解析（パワースペクトル）
4	表面筋電図とは（表面電極の仕組み）	19	処理と解析（フーリエ変換）
5	表面筋電図とは（運動時の計測）	20	処理と解析（wavelet変換）
6	表面筋電図とは（なにが測定出来るのか）	21	処理と解析（筋線維伝導速度）
7	計測とその準備（動作に対応する筋の選択）	22	処理と解析（筋疲労）
8	計測とその準備（正規化の方法）	23	応用の事例（筋活動の認識）
9	計測とその準備（同期させる力学的信号）	24	応用の事例（過剰な筋活動の定量化）
10	計測とその準備（筋電図活用の方向性）	25	応用の事例（筋線維組成と筋線維伝導速度）
11	計測とその準備（電極）	26	応用の事例（操作に対する上肢上方作業域）
12	計測とその準備（増幅器の感度）	27	応用の事例（感性工学分野での利用）
13	計測とその準備（周波数特性）	28	応用の事例（自転車エルゴの負荷制御）
14	計測とその準備（入力インピーダンス）	29	適応とその限界（スペクトル解析の限界）
15	計測とその準備（同相除去比）	30	適応とその限界（表面筋電図の万能性）

【履修上の注意事項】

臨床への応用を常に意識しながら、参考文献を利用した予習と講義内容の復習を行うこと。

【評価方法】

レポート（100%）で評価する。

【テキスト】

講義中に資料を配布する。

【参考文献】

- 1) 表面筋電図バイオメカニズム学会編 東京電気大学出版局 2006年,
- 2) 計測法入門 計り方・計る意味内 山靖・他 協同医書出版 2001年

生体運動・動作解析学

担当教員 加藤 浩

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 講義

単位数 4

【授業のねらい】

身体機能支援科学分野に関する定量的評価と科学的介入方法の確立をめざして、臨床現場で実施する計測の①目的、②生体計測の難しさ、③生体計測を実施するための臨床的思考過程についての講義を実施する。具体的には、運動力学的評価（床反力、関節モーメント等）や運動学的評価（関節角度、歩行速度、時間等）についての講義を行う。そして、三次元動作解析システムを理解しその知識と技術を臨床応用できるようになる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	生体計測の目的	16	床反力解析（X軸成分）とその評価
2	生体計測の難しさ	17	床反力解析（Y軸成分）とその評価
3	生体計測実施の臨床思考過程	18	床反力解析（Z軸成分）とその評価
4	床反力計（キャリブレーション）	19	COG解析（X軸成分）とその評価
5	複数枚床反力計を用いたときの床反力合成法	20	COG解析（Z軸成分）とその評価
6	加速度計を使用した簡易的床反力推測法	21	関節角度解析（股関節）とその評価
7	加速度計を使用した簡易的身体重心推測法	22	関節角度解析（膝関節）とその評価
8	三次元動作解析（キャリブレーション）	23	関節角度解析（足関節）とその評価
9	三次元動作解析（体節基準点算出法）	24	関節モーメント（股関節）とその評価
10	三次元動作解析（多点皮膚マーカ法）	25	関節モーメント（膝関節）とその評価
11	三次元動作解析（計測マーカの補完方法）	26	関節モーメント（足関節）とその評価
12	三次元動作解析（関節角度計算）	27	関節パワー（股関節）とその評価
13	三次元動作解析（身体重心・COG計算）	28	関節パワー（膝関節）とその評価
14	三次元動作解析（関節モーメント計算）	29	関節パワー（足関節）とその評価
15	下肢体節間力学エネルギー計算	30	下肢体節間力学エネルギーとその評価

【履修上の注意事項】

臨床への応用を常に意識しながら、参考文献等の予習と講義内容の復習を行うこと。

【評価方法】

レポート（100%）で評価する。

【テキスト】

講義中に配布する。

【参考文献】

『スポーツ技術のバイオメカニクス』植屋清見・ブックハウスHD 2011年

生体運動・動作解析学

担当教員 二宮 省悟

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 講義

単位数 4

【授業のねらい】

身体機能支援科学分野に関する定量的評価と科学的介入方法の確立をめざして、臨床現場で実施する計測の①目的、②生体計測の難しさ、③生体計測を実施するための臨床的思考過程について理解する。

その意義を踏まえた上で、計測デザインの実際について知識を深める。具体的には、運動力学的評価（床反力、関節モーメント等）や運動学的評価（関節角度、歩行速度、時間等）、重心動揺評価などについて学ぶ。最終的に、学んだ知識と技術を臨床応用できる。

【授業の展開計画】

第1回～10回

スポーツを例に挙げ、バイオメカニクスの基礎について学ぶ。また生体計測の目的、生体計測の難しさ、生体計測実施の臨床思考過程について理解する。

第11回～20回

臨床での様々な計測デザインの実際として、生体計測法について理解する。また、研究テーマに沿った測定法を中心に、信頼性および妥当性を考えた応用知識について学ぶ。

第21回～30回

床反力計、加速度三次元動作解析、重心動揺計など特殊な器具を用いた測定法で臨床応用できるよう、研究論文から具体的な解析法を読み取り、その活用法について学習する。さらに測定データの処理方法についても習得する。

【履修上の注意事項】

臨床への応用を常に意識しながら、テキスト・参考文献等の予習と講義内容の復習を行うこと。

【評価方法】

レポート（100%）で評価する。

【テキスト】

計測法入門—計り方、計る意味— 内山靖 協同医書出版 2001

その他、講義中に配布する。

【参考文献】

臨床評価指標入門 内山靖 協同医書出版 2003、関節モーメントによる歩行分析 臨床歩行分析研究会 医歯薬出版株式会社 1997、バイオメカニクスと動作分析の原理 Iwan W. Griffiths 有限会社ナップ 2008

生体酸素搬送システム評価学

担当教員 川俣 幹雄

配当年次 1年

開講時期 通年

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

生体酸素搬送システムの概要と各種疾患におけるその障害像について学ぶ。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	生体酸素搬送システム総論	16	基質の特性とエネルギー効率
2	運動と循環（循環器系の機能解剖）	17	無酸素運動
3	運動と循環（循環調節）	18	ATPの再合成と酸素搬送システム
4	運動と循環（心臓機能）	19	組織における酸素搬送
5	運動と循環（血管系の役割）	20	生体酸素搬送システム障害の評価法
6	運動と循環（末梢循環）	21	呼吸機能障害の評価法（換気力学）
7	運動と呼吸（呼吸器系の機能解剖）	22	呼吸機能障害の評価法（動脈血液ガス）
8	運動と呼吸（呼吸調節）	23	呼吸機能障害の評価法（運動能力）
9	運動と呼吸（運動負荷と換気応答）	24	循環機能障害の評価法（血行動態学）
10	運動と呼吸（運動負荷とガス交換）	25	循環機能障害の評価法（心電図）
11	運動と呼吸（ATの概念）	26	循環機能障害の評価法（運動能力）
12	運動と代謝（代謝系の機能解剖）	27	骨格筋機能障害の評価法（筋力、筋持久力）
13	運動と代謝（代謝調節）	28	骨格筋機能障害の評価法（エネルギー代謝）
14	骨格筋の特性	29	血中乳酸評価法
15	骨格筋におけるエネルギー産生	30	まとめ

【履修上の注意事項】

事前に授業テーマに関する予習を行うこと。また、復習も必ず行うこと。

【評価方法】

期末試験（レポート）100%で評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献】

特に指定しない。

呼吸調節機能評価学

担当教員 大池 貴行

配当年次 1年

開講時期 通年

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

本講では、呼吸調節のメカニズムについて理解を深めつつ、呼吸機能の評価とその意義、運動生理を踏まえた呼吸循環応答、呼吸障害の特性と運動制限のメカニズムについて理解できることをねらいとしている。そのうえで肺機能、呼気ガス分析の計測原理について講義を展開する。具体的には、呼吸機能評価（肺気量分画、フローボリューム曲線等）や呼吸生理学的評価（酸素摂取量、換気当量、ガス交換比等）についての講義を行う。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	呼吸に関わる器官と呼吸調節	16	健常人の肺機能検査 1
2	運動時の呼吸調節	17	健常人の肺機能検査 2
3	呼吸障害の特性	18	肺気量分画の解析
4	酸素搬送系障害と運動制限	19	フローボリューム曲線の解析
5	病態からみた呼吸障害と運動制限	20	呼吸筋力測定
6	スパイロメトリーとは	21	呼吸筋力指標の解釈
7	肺気量分画の決定因子	22	CPX 1 -装置設置とメディカルチェック-
8	肺気量分画からみた病態の特性	23	CPX 2 -運動負荷の設定-
9	フローボリューム曲線からみた病態の特性	24	CPX 3 -測定手順とリスク管理 1-
10	呼吸筋力の評価	25	CPX 4 -測定手順とリスク管理 2-
11	心肺運動負荷試験 (CPX) とは	26	CPX結果の解析 1 -健常人-
12	CPXにおける呼吸生理学的指標	27	CPX結果の解析 2 -肥満-
13	運動制限因子 1 -健常人-	28	CPX結果の解析 3 -閉塞性換気障害-
14	運動制限因子 2 -呼吸器疾患-	29	CPX結果の解析 4 -拘束性換気障害-
15	運動耐容能低下の呼吸生理学的基準	30	総括 -呼吸生理と運動による呼吸応答-

【履修上の注意事項】

呼吸に関する解剖学、生理学を学習し、本講義に臨むこと

【評価方法】

レポート (100%) で評価する

【テキスト】

講義中に配布する

【参考文献】

講義中に適宜、紹介する

計量解析研究論

担当教員 山住 賢司

配当年次 1年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

人文・社会科学を始め医療・福祉・保健領域といった様々な分野においても多変量データを用いた研究は当然のものとなってきている。複数個の変数によって特徴づけられた多変量データの解析法はその分析目的に応じて様々な手法が開発されているが、本講義では代表的なものを取り上げ、各手法の原理の理解と分析結果の解釈に繋がる応用的知識の習得を目標とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	多変量データ分析の基本的な考え方
2	クラスター分析
3	主成分分析
4	重回帰分析
5	重回帰分析における偏回帰係数の解釈法
6	パス解析の基本
7	モデル間比較の考え方
8	確認的因子分析
9	モデルの識別性と不適解の問題
10	構造方程式モデリング
11	探索的因子分析
12	因子数の選定と因子軸の回転
13	数量化分析
14	多次元尺度法
15	判別分析

【履修上の注意事項】

大学学部レベルでの統計学関連科目の知識を前提とする。
各回の内容について事前にテキストの該当部分を確認しておくこと。
また講義終了後に、各回の配布資料の内容をテキストで確認し理解を深めることを求める。

【評価方法】

期末レポート（80％）発表・講義への参加姿勢（20％）で評価する。

【テキスト】

「多変量データ解析法 心理・教育・社会系のための入門」 足立浩平（著） ナカニシヤ出版 2006

【参考文献】

「原因をさぐる統計学」 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫（著） 講談社 1992
「多変量データ解析法 一理論と応用一」 柳井晴夫（著） 朝倉書店 1994

脳形態機能解析学

担当教員 肥後 成美

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

精神の座は脳に求めることができ、脳の構造や働きを知ることはヒトを理解することに繋がる。医療系大学院生として、様々な障害・疾患を抱えた患者と接していく上での「心のより深い理解、より良い治療、より効果的な機能回復や介護」の一助として役立てて欲しい。そのためにも、学部教育の際は触れなかった詳細な知識と高度な理解力が要求される講義を行う。

【授業の展開計画】

1. 脳の歴史
2. 中枢神経系の発生
3. 中枢神経系の基本的な構造・働き（ニューロン、シナプス、活動電位）
4. 中枢神経系への血液供給、脳脊髄液
5. 脊髄の全体構造、上行路・下行路
6. 脳幹（延髄、橋、中脳）の構造
7. 脳幹（延髄、橋、中脳）の機能
8. 小脳の構造、機能、線維連絡
9. 間脳（視床、視床下部）の構成、機能、線維連絡
10. 大脳基底核の構成、機能、運動異常症に伴う神経機構
11. 大脳皮質の構造、機能（運動野・感覚野・連合皮質）
12. 脳神経、自律神経系
13. 視覚系（網膜の構造、伝導路、反射系）
14. 聴覚系、前庭系（蝸牛・前庭・半規管の構造、伝導路）
15. 脳の不思議

【履修上の注意事項】

予習・復習が不可欠となるような講義内容になると思います。自己責任の下、講義に参加して下さい。

【評価方法】

レポートで理解度を判定します。

【テキスト】

指定教科書はなし。毎回資料を配布する。

【参考文献】

「マーティン神経解剖学」野村巖・金子武嗣/監訳、西村書店、「カーペンター 神経解剖学」嶋井和世・出浦滋之/監訳、廣川書店「カールソン神経科学テキスト（脳と行動）」泰羅雅登・中村克樹/監訳、丸善株式会社

東洋医学基礎理論

担当教員 ○篠原 昭二、内田 匠治

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

鍼灸学の根幹をなす東洋医学の基礎理論について教授する。東洋医学の起源と歴史および東洋医学独自の人体構造、機能の概念や疾病感、病因論、診断学、臓腑経絡学説についても教授する。また、相補・代替療法の各種療法についても解説し、統合医療の一つとして、鍼灸医学がどのように貢献できるかについても方向性を示すことで、将来の専門職とともにチーム医療を実践しうる素養を養い、東洋医学的発想を生かせるようにする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	東洋医学の起源（内田匠治）
2	東洋医学の世界観、東洋の合理主義、東洋思想（内田匠治）
3	東洋医学の身体観（内田匠治）
4	東洋医学の疾病観・病因論（内田匠治）
5	鍼灸の歴史と特徴（内田匠治）
6	気の医学としての鍼灸の応用（内田匠治）
7	東洋医学の診断法（四診法）（篠原昭二）
8	臓象学説（篠原昭二）
9	経絡学説（篠原昭二）
10	兪穴学と穴性、穴位効能（篠原昭二）
11	経穴位置の変遷と世界標準（篠原昭二）
12	ホログラム理論と鍼灸（篠原昭二）
13	臓腑・経脈・経筋理論（篠原昭二）法について、統合医学の中の鍼灸の役割（長尾和治）
14	潜象界理論と鍼灸（内田匠治）
15	鍼灸医学の可能性—統合医療としての鍼灸—（篠原昭二）

【履修上の注意事項】

科目担当教員ごとに授業に対する指示があるのでそれに従うこと。
欠席した場合の資料等については、自身で後日担当教員に申し出て受け取ること。

【評価方法】

期末試験またはレポートによる評価とする。各担当教員ごとの評価を集計して、成績評価とする。

【テキスト】

科目担当教員ごとに指定する。
必要に応じて、資料を適宜配布する。

【参考文献】

授業の中で適宜紹介する。

基礎病態生理学

担当教員 齋田 和孝

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

- (1) 各調節系の生理学的反応を説明できる。
- (2) 各調節系における病態生理学的変化を説明できる。
- (3) 病態生理学的変化に伴う身体症状とその特徴を説明できる。

【授業の展開計画】

ホメオスタシスは体液の環境条件調整システムであり、複数の組織が相互に関連しあいながら全体として機能している。疾患はホメオスタシスが破綻した状態なので、破綻に至るまでの各調節系の相互関係とその変化、すなわち病態生理を知ることが疾患理解の基本となる。本講義では、生体に対する健康支援としてのアプローチを根拠に基づいて合理的かつ効果的に実践するために必ず必要となる、基本的な病態生理とその臨床的考え方を総合的に学ぶ。

週	授 業 の 内 容
1	病理学的機序の基本とホメオスタシス
2	体液バランスの調節
3	微小循環システムの役割
4	呼吸機能と呼吸不全
5	心不全の病態生理
6	慢性腎臓病（CKD）の病態生理
7	肝機能検査と病態生理
8	内分泌と自律神経の関連
9	自律神経と副腎によるストレス耐性
10	栄養とエネルギー代謝の生理
11	糖代謝と肥満
12	発熱と生体防御反応
13	感染症に対する生体反応
14	貧血の病態生理と鑑別
15	慢性炎症性疾患と自己免疫反応

【履修上の注意事項】

学部で学んだ解剖学、生理学、生化学、病理学の復習を、本講義の受講までに必ず終えておくこと。学部で使用した生理学と病理学の教科書を持参すること。

【評価方法】

授業中に口頭試問としての設問を設定し、その回答によって判断される「授業のねらい」各項目内容の理解度を（1）50%、（2）25%、（3）25%として総合的に評価する。

【テキスト】

とくに指定はしない。講義中に適宜紹介する。

【参考文献】

- ①「生理学テキスト 第7版」著：大地陸男、文光堂
- ②「内科診断学 第3版」編集：福井次矢、奈良信雄、医学書院

専門職連携応用論

担当教員 ○塚本 紀之、石井 里加子、永崎 孝之

配当年次 1年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

超高齢化社会に突入した日本では、要介護老人の介護の問題や地域在宅医療への取り組みなど、もはや一分野の医療専門種だけでは十分な対応ができない事象が増えている。そこで、本講義では歯科衛生士、理学療法士およびはり師、きゅう師の3つの専門職のそれぞれの業務内容を十分に相互理解したうえで、それらの連携についてそれぞれの専門職の視点から考え、それを提示できるようになる。その上で、地域包括ケアなどこれまでの「医療専門職」だけでは対応できない事象に対してより望ましい多職種連携（IPW）と協働の在り方を探る。

【授業の展開計画】

1. オリエンテーション
2. 歯科衛生業務の基本的内容を理解し、説明することができる。
3. 口腔保健状態の向上を目指すセルフケア法を体験し、各職種の口腔のケアへのかかわりについて考えを述べるができる。
4. 口腔保健と健康との関連について理解を深め、所属分野の学問的背景をもとに意見を交換し、障がい者や要介護者に対する介入の可能性について述べるができる。
5. 理学療法の基本的な業務内容を理解し説明することができる。
6. 理学療法業務（物理療法）を体験した上で、職種連携可能な具体的例についてそれぞれの立場から考察することができる。
7. 理学療法業務（動作介助）を体験した上で、職種連携可能な具体的例についてそれぞれの立場から考察することができる。
8. はり師きゅう師の基本的な業務内容を理解し説明することができる。
9. はり師の業務内容を体験し、職種連携可能な具体例について考察できる。
10. きゅう師の業務内容を体験し、職種連携可能な具体例について考察できる。
11. 歯科衛生士からみた専門職連携の在り方とその課題について提示できる（学生発表）。
12. 理学療法士からみた専門職連携の在り方とその課題について提示できる（学生発表）。
13. はり師きゅう師からみた専門職連携の在り方とその課題について提示できる（学生発表）。
14. 3専門職以外の職種（看護師、精神保健福祉士、介護福祉士、メディカルソーシャルワーカーなど）との連携について考察する（学生発表）。
15. まとめ

【履修上の注意事項】

【評価方法】

課題レポート100%

【テキスト】

必要なものについては適宜指示する。

【参考文献】

家族発達援助論

担当教員 永田 俊明

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

人間にとって福祉追求の第一次集団である家族が時には反社会的環境になる。児童虐待、DV等の事例がこのことを物語っている。つまり、家族システムが個々の文化の中で描くライフサイクルを軸に、そのシステム上の問題、また院生個々の研究テーマを基礎に家族の発達課題認識とその遂行上の援助について関連文献の輪読や事例分析を通して院生の報告によって探索し、理解を深める。

【授業の展開計画】

I 理論編

1. 発達精神病理学について
2. 精神病理の発達におけるダイナミックな過程
3. 発達における“道すじ”－発達の多元論
4. レジリエンスとリスク

II 研究編

5. 親子サブシステムと発達
6. 夫婦のサブシステムと発達

III 臨床応用編

7. 問題の診断・分類・概念化
8. 予防と治療

以上、パートをわけ、家族発達に関する援助のあり方について展開する。

【履修上の注意事項】

院生による担当制でレジュメを作成していただき、演習形式で展開していく。

【評価方法】

レポート60%及び報告40%により総合評価

【テキスト】

未定、決定次第購入。

【参考文献】

各サブ・テーマの文献、資料を使用する。また、各院生の研究テーマに沿って、随時参考書等を指定していく。

発達障害臨床論

担当教員 水間 宗幸

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

特別支援教育が始まり、発達障害を持つ子どもへの対応が求められる中、適切な支援が困難な状況にある。これらを支援する上で必要な生物学的なレベルからの認知特性、行動特性を理解する。これを基盤として問題行動を含めた日常生活の困難さを理解した上で必要な支援の考え方と組み立て方を修得する。また子どもへの支援だけでなく、家族支援や地域社会との連携を含めた生涯発達支援の在り方を考える

【授業の展開計画】

1. 生涯発達支援の視点からの理解と支援の重要性
2. 発達の種類と発達の障害
3. 発達と発達障害の育ちおよび環境の問題
4. 自閉症スペクトラム障害への理解 ①社会性の諸問題
5. 自閉症スペクトラム障害への理解 ②コミュニケーションの諸問題
6. 自閉症スペクトラム障害への理解 ③固執性とこだわりの諸問題
7. 自閉症スペクトラム障害への理解 ④想像力と心の理論の諸問題
8. 自閉症スペクトラム障害への理解 ⑤感覚と感情の諸問題
9. 学習障害への理解
10. 注意欠陥多動性障害への理解
11. 発達障害と虐待の関連についての理解
12. 特別支援教育と発達障害
13. ペアレント・トレーニングへの理解と方法
14. 青年期・成人期の発達障害への理解と支援の考え方
15. 各種専門機関との連携と専門性の諸問題

【履修上の注意事項】

特になし

【評価方法】

受講態度70%、レポート30%

【テキスト】

「発達障害の子どもたち」「発達障害のいま」いずれも杉山登志郎、講談社現代新書

【参考文献】

適宜紹介する

教育精神保健論

担当教員 山本 孝司

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

今日の子どもに関する問題（適応障害や学業不振、神経症、不登校やいじめ、暴力など）および子どもを取り巻く問題（貧困、教育格差など）について学び、教育に内在する予防的機能と治癒的機能、学校教育と関わる子どもの精神保健課題への対応や支援のあり方について説明できるようになる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	教育精神保健学の対象と方法－学校教育に関わる「臨床的な知」として
2	学校教育の始まりにおける問題－幼年期(1)幼児期の教育
3	学校教育の始まりにおける問題－幼年期(2)家庭の教育
4	学校教育の始まりにおける問題－幼年期(3)小1プロブレムと中1ギャップ
5	学校教育の終わりに関わる問題－思春期(1)中途退学、不登校の背景
6	学校教育の終わりに関わる問題－思春期(2)多様な性のあり方について
7	ヴィクトール・フランクルの方法(1)ロゴセラピー
8	ヴィクトール・フランクルの方法(2)実存分析
9	社会と教育－アメリカ進歩主義教育に焦点を当てて(1)エマソン
10	社会と教育－アメリカ進歩主義教育に焦点を当てて(2)デューイ
11	教育実践の理論(1)－シュタイナー
12	教育実践の理論(2)－モンテッソーリ
13	教育実践の理論(3)－フレネ
14	教育実践の理論(4)－ニール
15	まとめ

【履修上の注意事項】

授業に際しては事前に資料を読み、事後には復習をすること。

【評価方法】

授業における研究発表・報告（30%）、及び、小レポート（30%）、総合レポート（40%）をあわせて総合的に評価する。

【テキスト】

開講時に指示する

【参考文献】

適宜紹介する

高齢者精神保健論

担当教員 後藤 秀昭

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

1. 高齢期における心理社会的諸現象を理解し、メンタルヘルスを阻害する要因を考究できる。
2. 高齢期の精神保健問題の予防、家庭や地域におけるメンタルヘルス支援の理論と具体的方法を理解できる。
3. 高齢期の精神障害の中で、認知症やうつ病を中心に高齢者のメンタルケアや支援、家族や地域支援について理解できる。

【授業の展開計画】

高齢期は心身機能の低下、退職による社会的地位や収入の減少、配偶者や親しい友人などとの離・死別等、複合喪失のステージにある。これら高齢者のライフイベントやステージに応じた精神保健問題の予防、家庭や地域における精神的健康づくりについて教授する。

さらに高齢期精神障害の中で「認知症」や「うつ病」を中心に、高齢者のメンタルヘルスやメンタルケアはもとより、介護家族への支援、地域ケアや地域保健計画、予防や健康の保持・増進などの社会的支援方法についても教授する。

1. 高齢期（概ね65歳以上）における心理社会的環境の変化がもたらす精神保健の課題
2. 高齢期精神保健対策の現状と課題
3. 高齢期のメンタルヘルス支援の理論と具体的方法
4. 高齢期の認知症の理解
5. 高齢期の認知症のメンタルケア（家族、地域支援を含む）
6. 高齢期のうつ病の理解
7. 高齢期のうつ病へのメンタルケア（家族、地域支援を含む）

※本講義は、各テーマについての講義と、テーマに関連した論文（教員が指定する）を院生がまとめて発表して集団討議する授業とを交互に行う。教員からの一方的な講義ではなく、教員と院生の双方向の授業を展開する。

【履修上の注意事項】

特になし

【評価方法】

課題レポート（50%）、講義内容に関するディスカッションへの寄与（30%）、教員の質問に対する応答（20%）

【テキスト】

テキストは指定しない。
必要な資料は、適宜配布する。

【参考文献】

特になし

障害児発達援助論

担当教員 李 玄玉

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

知的障害、注意欠陥多動性（ADHD）、自閉症、コミュニケーション障害などの、発達障害への理解を深めると共に、発達障害児への援助について教授する。特に、幼稚園、小・中学校など特別支援教育の現場での課題や実際の事例を取り上げながら、障害のある個人を対象とした援助から、家庭や学校・地域を含む包括的な援助、社会的参加の援助、生涯にわたる援助などについて教授する。

【授業の展開計画】

1. オリエンテーション；
授業計画の説明・障害児との経験や障害児に対する考え方について
2. 発達障害児への援助 ―現状と課題―
3. 障害児の発達援助の基礎となる理論と課題
4. 援助にあたっての医学的問題
5. 障害児の社会的関係形成困難へのアプローチ
6. 機能的コミュニケーション訓練の臨床的意義及び訓練の概要
7. コミュニケーションの発達援助
8. 相互行動論からの援助アプローチ
9. 「注意」と「動き」に対する援助アプローチ
10. 教育的対応としての援助
11. インクルーシブ・エデュケーション (inclusive education)
12. 地域における早期療育システムについて
13. 家族支援の動向と実践
14. 親指導と親子関係の改善
15. 地域参加の促進と社会参加スキル形成

【履修上の注意事項】

発達障害・発達障害児についての研究動向について調べる。

【評価方法】

発表や発言、
資料準備などを 総合的に評価する。

【テキスト】

プリント資料を配布する。

【参考文献】

障害幼児の発達援助；松坂清俊；コレール社

口腔機能リハビリテーション論

担当教員 石井 里加子

配当年次 1年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

顎口腔の構造（解剖）と機能を理解し、摂食嚥下機能の獲得および回復と、それを支える歯や口の健康を保つためのケア方法について知識を深め実施できるようになる。

また、障がい児・者および要介護者に対する口腔機能リハビリテーションと口腔のケアの考え方を理解したうえで、個別性に合わせた器質的口腔ケアと機能的口腔ケアを計画し実施できるようになる。

【授業の展開計画】

1. 口腔機能と口腔機能リハビリテーションについて理解する (石井)
2. 摂食嚥下のメカニズムについて説明できる (石井)
3. 摂食嚥下の発達について説明できる (石井)
4. 顎口腔・咽頭領域の解剖と生理を理解する (金子)
5. 摂食嚥下障害の原因と病態について説明できる (石井)
6. 摂食嚥下リハビリテーションの進め方について説明できる (石井)
7. 摂食嚥下の病態と診察・診断を理解する (石井・金子)
8. 摂食嚥下にかかわる検査評価方法を習得する (石井)
9. 摂食嚥下における間接訓練法を習得する (石井)
10. 摂食嚥下における直接訓練法を習得する (石井)
11. 口腔保健の重要性を理解し具体的な方法について説明ができる (石井)
12. 障がい児・者における口腔ケア計画を立案し実施することができる (石井)
13. 要介護者における口腔のケア方法を習得する (石井)
14. 顎口腔機能回復治療について理解する (金子)
15. リスク管理について説明できる (石井)

【履修上の注意事項】

予習・復習を行う。

【評価方法】

課題レポート80% 態度20%

【テキスト】

必要に応じて適宜指示する。

【参考文献】

必要に応じて適宜指示する。

口腔機能発達支援論

担当教員 石川 裕子

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

ライフステージにおける口腔機能の発達過程の知識を習得することで口腔機能の発達支援の意義を理解し、今後どのように支援できるかを考察する。

- ①各口腔機能の発達の過程を関係づけることができる
- ②口腔機能発達支援について討論できる

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	口腔機能：食べる機能
2	口腔機能：咀嚼・唾液
3	口腔機能：栄養摂取・吸収
4	ライフステージの身体的、精神的、環境的特徴
5	ライフステージと口腔機能
6	ライフステージと運動機能
7	口腔機能の発達障害並びに異常
8	口腔機能の発達支援
9	口腔機能の発達支援に関する文献を読む
10	栄養摂取法を利用した発達支援
11	栄養摂取法を利用した発達支援に関する文献を読む
12	行動療法を利用した発達支援
13	行動療法を利用した発達支援に関する文献を読む
14	口腔機能発達に関する文献を検索する
15	調べた文献の発表、ディスカッション、まとめ

【履修上の注意事項】

なし。

【評価方法】

レポート（100％）で評価する。

【テキスト】

適宜、紹介する。

【参考文献】

適宜、紹介する。

介護予防フロンティア戦略論

担当教員 加藤 浩

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

当該授業では、筋骨格系を主とした下肢運動器疾患に焦点をあて、介護予防に必要な「運動指導」、「高齢者の筋力増強」、「転倒骨折の予防」、「日常生活関連動作訓練」を如何に推進するかについて、上記の3つの視点から体力及び生理機能、運動のトレーナビリティ等について文献レビューを行う。そして、今後のより実践的で効果的な介護予防のあり方について議論する。そして、リハビリテーションに必要な三次予防の意義とその具体的取り組みについて論じることができるようになる。

【授業の展開計画】

- 1 体力及び生理機能に関する文献レビュー（情報検索）
- 2 体力及び生理機能に関する文献レビュー（情報の批判的吟味）
- 3 体力及び生理機能に関する文献レビュー（臨床患者への情報適応）
- 4 体力及び生理機能に関する文献レビュー（治療効果の評価）
- 5 トレーナビリティに関する文献レビュー（情報検索）
- 6 トレーナビリティに関する文献レビュー（情報の批判的吟味）
- 7 トレーナビリティに関する文献レビュー（臨床患者への情報適応）
- 8 トレーナビリティに関する文献レビュー（治療効果の評価）
- 9 三次予防に関する文献レビュー（情報検索）テーマ自由
- 10 三次予防に関する文献レビュー（情報の批判的吟味）テーマ自由
- 11 三次予防に関する文献レビュー（臨床患者への情報適応）テーマ自由
- 12 三次予防に関する文献レビュー（治療効果の評価）テーマ自由
- 13 介護予防フロンティア戦略 総合プレゼンテーション1
- 14 介護予防フロンティア戦略 総合プレゼンテーション2
- 15 介護予防フロンティア戦略 総合プレゼンテーション3

【履修上の注意事項】

受講者の興味のある分野の文献を輪番でレビューしていく方法で行う。事前の文献収集をしっかりと行い講義に参加すること。

【評価方法】

プレゼンテーション発表（100%）で評価する。

【テキスト】

講義中に配布する。

【参考文献】

適宜、紹介する。

介護予防フロンティア戦略論

担当教員 二宮 省悟

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

平成17(2005)年に厚生労働省・文部科学省から策定された10カ年戦略「健康フロンティア戦略」をもとに、当該授業では、介護予防に必要な「運動指導」、「高齢者の筋力増強」、「転倒骨折の予防」、「日常生活関連動作訓練」を中心に如何に推進するかについて、文献レビューを行う。そして、今後の実践的で効果的な介護予防のあり方について議論する。そして、リハビリテーションに必要な介護予防の意義とその具体的取り組みについて論じることができるようになる。

【授業の展開計画】

1. 運動指導に関する文献レビュー（情報検索）
2. 運動指導に関する文献レビュー（情報の批判的吟味）
3. 運動指導に関する文献レビュー（臨床患者への情報適応）
4. 運動指導に関する文献レビュー（治療効果の評価）
5. 高齢者の筋力増強に関する文献レビュー（情報検索）
6. 高齢者の筋力増強に関する文献レビュー（情報の批判的吟味）
7. 高齢者の筋力増強に関する文献レビュー（臨床患者への情報適応）
8. 高齢者の筋力増強に関する文献レビュー（治療効果の評価）
9. 転倒骨折の予防に関する文献レビュー（情報検索）
10. 転倒骨折の予防に関する文献レビュー（情報の批判的吟味）
11. 転倒骨折の予防に関する文献レビュー（臨床患者への情報適応）
12. 転倒骨折の予防に関する文献レビュー（治療効果の評価）
13. 日常生活関連動作訓練に関する文献レビュー
14. サルコペニアに関する文献レビュー
15. 効果的な介護予防プログラムの開発・普及に関する文献レビュー

【履修上の注意事項】

受講者の興味のある分野の文献を輪番でレビューしていく方法で行う。事前の文献収集をしっかりと行い関連事項に関し予習し、講義に参加すること。また、十分に復習すること。

【評価方法】

プレゼンテーション発表（100%）で評価する。

【テキスト】

講義中に資料を配布する。

【参考文献】

理学療法士・作業療法士のためのヘルスプロモーション—理論と実践 日本ヘルスプロモーション理学療法学会
南江堂, 2014

疾病予防支援論

担当教員 川俣 幹雄

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

生活習慣病、非感染性疾患の概念とその予防法について学ぶ。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	生活習慣病の概念
2	非感染性疾患の概念
3	運動疫学とは？
4	身体活動量の概念
5	運動と免疫機能
6	運動と生活習慣病の予防（運動の効果）
7	運動と生活習慣病の予防（運動の指導法）
8	運動とがんの予防
9	喫煙の医学
10	能動喫煙と受動喫煙
11	喫煙の制御法
12	疾病予防と食生活
13	身体活動量評価の実際
14	疾病予防と行動科学
15	予防医学と保健制度

【履修上の注意事項】

事前に授業テーマに関する予習を行うこと。また、復習をしっかりと行うこと。

【評価方法】

期末試験（レポート）100%で評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献】

特に指定しない。

内部障害フロンティア戦略論

担当教員 大池 貴行

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

内部障害に伴う身体活動低下は、身体機能への廃用性変化を招来し、2次的障害へとつながるリスクとなり得る。そればかりか生活の質に悪影響を及ぼす1つの要因ともなり得る。そのため本講受講者は内部障害における身体活動低下の要因を追求し、適切な回復支援、生活活動支援、予防支援を理解できることを学習目標とする。

本講では、呼吸障害を中心にリハビリテーションの観点から回復支援、生活活動支援、予防支援を軸に呼吸障害を有する者への支援方法について理解を深め、そのあり方について議論する。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	呼吸器疾患患者の在宅生活の実態
2	呼吸器疾患患者における身体活動制限
3	呼吸器疾患患者の身体活動向上に向けた支援
4	症例1：呼吸器疾患症例に関する臨床的疑問・問題の定式化
5	症例1：定式化した問題に対する解決策の検討（回復支援）
6	症例1：定式化した問題に対する解決策の検討（生活活動支援）
7	症例1：定式化した問題に対する解決策の検討（予防支援）
8	症例1：呼吸器疾患患者への支援方法の立案
9	症例1：ディスカッション、総括
10	症例2：呼吸器疾患症例に関する臨床的疑問・問題の定式化
11	症例2：定式化した問題に対する解決策の検討（回復支援）
12	症例2：定式化した問題に対する解決策の検討（生活活動支援）
13	症例2：定式化した問題に対する解決策の検討（予防支援）
14	症例2：呼吸器疾患患者への支援方法の立案
15	症例2：ディスカッション、総括

【履修上の注意事項】

呼吸障害を有する者の病態の特性および身体機能低下について学習し、本講義に臨むこと

【評価方法】

レポート（100%）で評価する

【テキスト】

講義中に配布する

【参考文献】

講義中に適宜、紹介する

身体機能制御論

担当教員 塚本 紀之

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

鍼灸の治効の科学的根拠を理解するために、主に基礎医学的な面より関連のあるトピックスを紹介し、鍼灸の基礎研究の方向性を探る。第8回から第15回については、英文総説を教材として用いて、輪読を行い、英文読解力も養う。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	鍼灸研究の歴史
2	皮膚の感覚受容器
3	痛覚
4	鍼鎮痛とそのメカニズム
5	筋緊張の調節
6	鍼灸と自律神経系
7	鍼灸と代謝
8	脳血流と鍼の効果
9	経穴の特異性
10	神経再生と鍼刺激
11	神経性因子と鍼刺激
12	神経内分泌調節と鍼刺激
13	神経系と免疫系
14	内分泌系と免疫系
15	鍼灸と免疫

【履修上の注意事項】

身体機能予防支援科学分野を専攻する者は履修することが望ましい。

【評価方法】

論文抄読のプレゼンテーション力（50%）および講義中の討論力（50%）で総合評価する。

【テキスト】

講義中に適宜紹介する。

【参考文献】

講義中に適宜紹介する。

和漢療法応用学

担当教員 内田 匠治

配当年次 1年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

漢方医学の歴史と基礎理論特に鍼灸と対をなす湯液について教授する。特に漢方薬の特徴、臨床の場で用いられている方剤や薬膳の実際についても概説する。また、医療の歴史における生薬の位置づけや、世界の民間伝承薬の特徴、臨床応用についてなどを教授する。和漢療法の長所、短所を知ることにより、将来各専門職の領域において、和漢療法が選択肢の一つとしての併用できるようになる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	東洋医学と漢方
2	湯液の歴史
3	湯液の基礎理論 1
4	湯液の基礎理論 2
5	湯液の基礎理論 3
6	湯液の基礎理論 4
7	湯液の基礎理論 5
8	湯液の基礎理論 6
9	湯液の基礎理論 7
10	日本の漢方薬とその制度
11	世界の薬草療法
12	日本の民間伝承生薬の歴史と特徴 1
13	日本の民間伝承生薬の歴史と特徴 2
14	日本の民間伝承生薬の歴史と特徴 3
15	日本の民間伝承生薬の歴史と特徴 4

【履修上の注意事項】

予習、復習や学習を進める上での指示があればそれに従うこと。

【評価方法】

レポートまたは筆記試験とする。

【テキスト】

授業の際に適宜資料を配布する。

【参考文献】

授業の中で適宜紹介する。

応用口腔機能支援科学特論

担当教員 金子 憲章

配当年次 1年

開講時期 通年

単位区分 選択：口腔機能支援科学分野

授業形態 講義

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

口腔保健学は、現在行われている齲蝕、歯周病予防法だけに止まらず、新しく開発された保存・歯周治療法および器具・機器の使用・適応への知識も必要となってくる。また、異なる検体に対する検査法とその意味、現在行われている処置の評価、これらについての論文・出版物を用いて理解できる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	レーザー治療1	16	歯肉溝滲出液検査1
2	レーザー治療2	17	歯肉溝滲出液検査2
3	歯周組織再生治療1	18	歯肉溝滲出液検査3
4	歯周組織再生治療2	19	歯肉溝滲出液検査4
5	歯周組織再生治療3	20	環境因子測定検査1
6	PMTC1	21	環境因子測定検査2
7	PMTC2	22	根管治療における新技術及び薬剤1
8	PMTC3	23	根管治療における新技術及び薬剤2
9	PMTC4	24	修復物における最新素材とその審美性1
10	DDS	25	修復物における最新素材とその審美性2
11	3DS1	26	器具の劣化に対する対応1
12	3DS2	27	器具の劣化に対する対応2
13	唾液検査1	28	インプラント治療1
14	唾液検査2	29	インプラント治療2
15	唾液検査3	30	インプラント治療3

【履修上の注意事項】

基本的にテーマにそって、学生本人が内容を検討しプレゼンテーションを行う。それについてディスカッションを行う。

【評価方法】

講義中の質疑応答60%、発表・レポート40%

【テキスト】

なし

【参考文献】

適時必要な教科書、文献等を紹介する。

応用口腔機能支援科学演習

担当教員 金子 憲章

配当年次 1年

単位区分 選択：口腔機能支援科学分野

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4

【授業のねらい】

口腔保健学における研究の意義を理解させ、今までに学んできた口腔保健学の授業より興味ある論文を検索させ、その内容が理解できるように指導する。論文については口腔保健学に関連した項目の論文について実験方法、結果、考察等の問題点を模索させる。各数編の論文を理解させることで、一連の論文記述の方法、展開を習得できる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	口腔保健学とは 1	16	検査関連口腔保健学研究の論文の分析 1
2	口腔保健学とは 2	17	検査関連口腔保健学研究の論文の分析 2
3	口腔保健学における研究の意味 1	18	検査関連口腔保健学研究の論文の分析 3
4	口腔保健学における研究の意味 2	19	検査関連口腔保健学研究の論文の分析 4
5	細菌関連口腔保健学研究の論文の分析 1	20	器具関連口腔保健学研究の論文の分析 1
6	細菌関連口腔保健学研究の論文の分析 2	21	器具関連口腔保健学研究の論文の分析 2
7	細菌関連口腔保健学研究の論文の分析 3	22	器具関連口腔保健学研究の論文の分析 3
8	細菌関連口腔保健学研究の論文の分析 4	23	治療法関連口腔保健学研究の論文の分析 1
9	細菌関連口腔保健学研究の論文の分析 5	24	治療法関連口腔保健学研究の論文の分析 2
10	病理関連口腔保健学研究の論文の分析 1	25	治療法関連口腔保健学研究の論文の分析 2
11	病理関連口腔保健学研究の論文の分析 2	26	各論文の特性・問題点・実験法の分析 1
12	病理関連口腔保健学研究の論文の分析 3	27	各論文の特性・問題点・実験法の分析 2
13	組織関連口腔保健学研究の論文の分析 1	28	各論文の特性・問題点・実験法の分析 3
14	組織関連口腔保健学研究の論文の分析 2	29	各論文の結果とデータの分析法の検討 1
15	組織関連口腔保健学研究の論文の分析 3	30	各論文の結果とデータの分析法の検討 2

【履修上の注意事項】

基本的にテーマにそって、学生本人が内容を検討しプレゼンテーションを行う。それについてディスカッションを行う。

【評価方法】

講義中の質疑応答60%、発表・レポート40%

【テキスト】

なし

【参考文献】

適宜必要な教科書、文献等を紹介する。

社会口腔機能支援科学特論

担当教員 徳永 淳也

配当年次 1年

単位区分 選択：口腔機能支援科学分野

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 講義

単位数 4

【授業のねらい】

ヒューマンケアでは、提供者側のどのような要因が、患者や利用者側のどのような結果(アウトカム)の改善につながるかについての客観的評価は必須であり、測定(評価)手法を確立できない事象については有効な改善策を見つけることはできない。口腔保健学に関連する管理学的事象における基礎的用語や測定手法を精選された論文・書籍を用いて講義し、文献の批判的吟味を通じて、研究テーマの具体化および研究デザイン作成、統計的評価手法の習得を目的とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	研究(評価)手法は、なぜ重要か	16	バイアスコントロールと交絡因子の理解
2	問題意識と研究テーマの検討	17	因果関係はどのようにして判定されるか
3	文献検索と批判的吟味の意義	18	社会調査における研究手法
4	文献検索方法の実際	19	質的研究におけるデータの実証分析
5	論文の批判的吟味の理解	20	心理測定尺度と測定の考え方
6	研究テーマの具体化:研究方法の検討と立案	21	測定の信頼性、妥当性の概念とその評価
7	研究デザインの決定:調査対象の選択条件	22	情報分析Ⅰ 記述・推測統計
8	研究法の実際:疫学とは何か、疫学的な考え方	23	情報分析Ⅱ:データの整理と検定、推定
9	疫学研究の各種方法	24	情報分析Ⅲ:2変数間の検定
10	研究デザインの理解Ⅰ、記述疫学	25	情報分析Ⅳ:パラメトリック検定
11	研究デザインの理解Ⅱ、分析疫学	26	情報分析Ⅴ:ノンパラメトリック検定
12	研究デザインの理解Ⅲ、横断研究	27	情報分析Ⅵ:重回帰分析
13	研究デザインの理解Ⅳ、症例対照研究	28	情報分析Ⅶ:ロジスティック回帰分析
14	研究デザインの理解Ⅴ、コホート研究	29	情報分析Ⅷ:因子分析
15	研究デザインの理解Ⅵ、介入研究	30	情報分析Ⅸ:データマイニング手法

【履修上の注意事項】

講義前に課された論文を精読し、その調査研究の長所と短所について簡潔に要約し、統計分析手法について確認する作業を毎時間行ってくること。

【評価方法】

講義で課された論文発表の内容で100%評価する。

【テキスト】

論文・テキストは適宜紹介するが、院生の研究テーマ決定後には関連領域の論文をできるだけ選択して使用する。

【参考文献】

適宜紹介する

社会口腔機能支援科学演習

担当教員 徳永 淳也

配当年次 1年

開講時期 通年

単位区分 選択：口腔機能支援科学分野

授業形態 演習

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

口腔保健学における社会的事象について、その社会学、行動科学、心理学的な諸側面に注目しながら、他領域も含めた研究成果を紹介し、基本的理論や概念枠組みに対する理解と習熟をはかる。それらを基盤として、事象の理論的説明を試みつつ、特論で修得した基礎的分析知識等を基に文献の批判的吟味を行い、最新の研究成果を参考に、より質の高い自身の研究課題の醸成をはかる。

【授業の展開計画】

週	授業の内容	週	授業の内容
1	口腔保健学における社会的接近の重要性	16	口腔保健学における仕事要求度モデルの特徴
2	口腔保健における社会的諸事象に対する視程	17	努力報酬不均衡モデルと口腔保健
3	患者行動と患者役割行動	18	職業性ストレスの捉え方と歴史的経緯
4	口腔保健における患者役割行動	19	口腔保健における職業性ストレスとMBI
5	患者役割行動と受診行動	20	口腔保健における感情労働把握
6	口腔保健における受診行動の規定要因	21	医療機関と質改善活動
7	受療行動説明モデル	22	ボルドリッジ国家経営品質賞と質評価、ISO
8	口腔保健における受療行動説明モデル	23	質改善活動のストレス緩衝効果
9	専門職文化と専門職支配	24	組織文化とストレス緩衝策
10	口腔保健における専門職プロジェクト	25	歯科医療機関における組織文化
11	ジェンダー秩序と歯科衛生士	26	組織文化と職務満足度
12	ジェンダー秩序と他の歯科専門職	27	組織文化と患者満足度、職務満足度
13	口腔保健学の医療管理学的理解の重要性	28	医療専門職の実践能力の把握と特徴
14	ストレスプロセスとその測定	29	歯科衛生士の実践能力研究
15	職業性ストレスと仕事要求度モデル	30	実践能力と患者アウトカムの関連

【履修上の注意事項】

課題論文を精読し要約した資料を作成し講義に出席すること

【評価方法】

課題論文の内容についての発表(50%)、口頭試問(50%)で評価する

【テキスト】

毎時間配布する論文を使用する

【参考文献】

適宜紹介する

発達口腔機能支援科学特論

担当教員 石川 裕子

配当年次 1年

開講時期 通年

単位区分 選択：口腔機能支援科学分野

授業形態 講義

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

口腔機能支援としての栄養指導を行うために、栄養および食品に関する基礎的な知識を習得し、疾病と栄養素との関係や現代の栄養の問題を理解する。

- ①現代の栄養の問題から栄養指導内容に関係づけることができる
- ②疾病と栄養素との関係について討議することができる

【授業の展開計画】

週	授業の内容	週	授業の内容
1	栄養素とその役割（三大栄養素）	16	糖尿病
2	栄養素とその役割（ビタミン・ミネラル）	17	糖尿病と栄養
3	栄養素とその役割（その他の成分）	18	脂質異常症
4	食事摂取基準、消化・吸収	19	脂質異常症と栄養
5	エネルギー代謝	20	痛風
6	骨代謝	21	痛風と栄養
7	食品成分とその変化	22	高血圧
8	食物とおいしさ	23	高血圧と栄養
9	栄養と健康	24	動脈硬化症と栄養
10	栄養と健康	25	骨粗鬆症と栄養
11	健康阻害要因：栄養素、運動	26	味覚障害、口腔乾燥症と栄養
12	健康阻害要因：飲酒、喫煙	27	歯科における栄養指導：基本
13	行動変容と栄養教育：基本	28	歯科における栄養指導：論文より
14	行動変容と栄養教育：応用	29	歯科における栄養指導：ロールプレイ
15	行動変容と栄養教育：論文より	30	まとめ

【履修上の注意事項】

なし。

【評価方法】

レポート（100％）で評価する。

【テキスト】

特になし。

【参考文献】

適宜、紹介する。

発達口腔機能支援科学演習

担当教員 石川 裕子

配当年次 1年

開講時期 通年

単位区分 選択：口腔機能支援科学分野

授業形態 演習

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

口腔保健学、および発達口腔機能支援科学における研究とは何かを理解するために、色々な論文を検索し内容を検討する。

- ①口腔保健学における研究の意義を述べることができる
- ②与えられた文献について討議することができる

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	口腔保健学、発達口腔機能支援科学とは	16	口腔機能研究関連の文献検索
2	口腔保健学の研究とは	17	文献検索
3	論文の構成について	18	文献抄読
4	研究計画書・研究倫理について	19	文献抄読
5	口腔保健学分野の研究の動向	20	データの分析方法について
6	口腔保健学分野の論文紹介	21	結果・考察について
7	口腔ケア関連の文献検索	22	発表方法について
8	文献検索	23	テーマを決めて文献検索
9	検索した文献について：方法	24	文献検索
10	検索した文献について：結果	25	文献抄読
11	検索した文献について：考察	26	文献抄読（プレゼンテーション）
12	周術期関連の文献検索	27	テーマを決めて文献検索
13	文献検索	28	文献検索
14	文献抄読	29	文献抄読
15	文献抄読	30	文献抄読（プレゼンテーション）

【履修上の注意事項】

なし。

【評価方法】

プレゼンテーション50%、レポート50%で評価する。

【テキスト】

特になし。

【参考文献】

適宜、紹介する。

身体運動機能支援科学特論

担当教員 加藤 浩

配当年次 1年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 講義

単位数 4

【授業のねらい】

西洋近代医学の視点からみた身体機能支援分野における筋機能向上に必要なものは、従来の量的な筋力トレーニングに加え、別の質的な筋力向上を図るトレーニングプログラムを作成することであり、その筋の質的評価法の確立である。しかし、現状ではADLに直結した動的な質的能力を客観的に評価する方法が極めて少ない。そこで、当該科目では筋の質的能力（質的機能）とは一体、何なのか？臨床的視点から筋機能の特徴について論ずる。そして、筋の質的機能の臨床的意義について論ずることができるようになる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	筋力トレーニングのあり方を見直す	16	直列弾性要素からみた治療戦略
2	筋腱複合体としての筋力	17	収縮要素からみた治療戦略
3	身体動作の階層性からみた筋力	18	収縮感覚を重視した治療戦略
4	筋機能の3要素（空間的要素）	19	単関節から多関節運動を重視した治療戦略
5	筋機能の3要素（強さの要素）	20	直線運動から回旋運動を重視した治療戦略
6	筋機能の3要素（時間的要素）	21	腕振りを意識させた歩行練習
7	多関節運動連鎖とは	22	踵接地を意識させた歩行練習
8	身体姿勢制御からみた多関節運動連鎖	23	床反力ベクトルを考慮した治療戦略
9	運動連鎖下における筋協調運動	24	筋機能の空間的要素を考慮した治療戦略
10	開運動連鎖（OKC）と閉鎖運動連鎖（CKC）	25	筋機能の強さ要素を考慮した治療戦略
11	OKCとCKCでの筋活動の特徴	26	筋機能の時間的要素を考慮した治療戦略
12	OKCとCKCでの筋機能の特徴	27	筋の収縮・弛緩の連鎖を利用した治療戦略
13	運動連鎖システム（筋の収縮連鎖の破綻）	28	下肢遠位からの運動連鎖を利用した治療戦略
14	運動連鎖システム（運動連鎖の破綻）	29	体幹からの運動連鎖を利用した治療戦略
15	運動連鎖システム（力の連鎖の破綻）	30	力の連鎖を考慮した治療戦略

【履修上の注意事項】

臨床への応用を常に意識しながら、参考文献等の予習と講義内容の復習を行うこと。

【評価方法】

レポート（100%）で評価する。

【テキスト】

講義中に配布する。

【参考文献】

『多関節運動連鎖からみた変形性関節症の保存療法—刷新的理学療法—』井原秀俊・他編 全日本病院出版会 2008年

身体運動機能支援科学特論

担当教員 肥後 成美

配当年次 1年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 講義

単位数 4

【授業のねらい】

神経科学の発達には、そのスピード、内容共に目を見張るものがある。最近の科学的知見でも、残余機能の機能回復・増強に関与している神経伝導路が報告されていた。今後は益々高度な知識や技術を求められる環境でのリハビリ行為になると思われ、中枢神経系を十分に理解した上での医療行為は必須である。そのための専門基礎医学の一つとして、神経科学の深みを体験して欲しい。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	脳と行動	16	運動の校正と計画
2	神経細胞、神経回路と行動	17	運動単位と筋活動
3	イオンチャネル	18	脊髄反射
4	伝導性のシグナル：活動電位	19	歩行運動
5	神経筋接合部でのシグナル伝達	20	随意運動：一次運動皮質
6	神経伝達物質	21	随意運動：頭頂葉と運動前野
7	神経と運動単位の疾患	22	視線の制御
8	知覚と運動の機能的構成	23	前庭系
9	認知機構	24	姿勢
10	触覚	25	小脳
11	痛み	26	大脳基底核
12	視覚情報処理：網膜	27	神経変性疾患
13	高次視覚情報処理	28	脳幹の運動機能
14	内耳	29	自律神経系と視床下部
15	匂いと味	30	情動と感情

【履修上の注意事項】

神経解剖学、神経生理学、神経行動学など学習領域が多岐に渡るため、各自の自覚を伴った学習が求められる。

【評価方法】

レポート（100%）で評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献】

適宜、紹介する。

身体運動機能支援科学特論

担当教員 二宮 省悟

配当年次 1年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 講義

単位数 4

【授業のねらい】

身体運動機能支援分野における筋力・体力トレーニングについて運動生理学的基礎と応用の側面から理解する、また、トレーニングが身体へどのような影響をもたらすかについて多角的に論じ、分析する手法について学習する。さらにスポーツ選手、障がい者、高齢者に対するトレーナビリティについて理解を深め、トレーニングの総合的な考え方を習得する。

【授業の展開計画】

以下の内容で講義を行い、トレーニングの身体に与える影響について基本的な知識を習得する。また、院生の研究テーマに関連した研究論文を適宜用いて、さらに具体的な知識を養う。

第1回～10回

神経支配とトレーニング、骨格筋とトレーニング、ガス交換とトレーニング、心臓血管系とトレーニングについて解説する。

第11回～20回

血液組成とトレーニング、エネルギー代謝とトレーニング、体温調節とトレーニング、ホルモンとトレーニングについて解説する。

第21回～第30回

一流選手のトレーナビリティ、障がい者のトレーナビリティ、高齢者のトレーナビリティについて解説する。

※教員からの一方的な講義だけでなく、授業内で得た知識から研究テーマに関連した情報を抽出し、討議を行い、教員と院生の双方向の授業を展開する。

【履修上の注意事項】

臨床への応用を常に意識しながら、参考文献等の予習と講義内容の復習を行うこと。

【評価方法】

レポート（100%）で評価する。

【テキスト】

講義中に配布する。

【参考文献】

講義中に適宜、紹介する。

身体運動機能支援科学演習

担当教員 加藤 浩

配当年次 1年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4

【授業のねらい】

身体運動機能支援科学分野の1つである運動器疾患の機能障害に関する基本的な研究方法について理解を深めるため、対象者の運動・動作・活動を具体的かつ定量的に捉える解析手法を演習形式で展開する。そして、模擬データの結果を統合・解釈し、対象者に即した運動・動作・活動を遂行するための効果的な介入方法について学習する。そして、実際の計測からデータ処理、そして、得られたデータを分析してプレゼンテーションすることができる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	表計算ソフトの使用法	16	IEMG・wavelet解析 (Hip OA_股関節周囲筋)
2	ダウンサンプリング法	17	IEMG・wavelet解析 (Hip OA_膝関節周囲筋)
3	圧センサを使用したトリガー点抽出法	18	IEMG・wavelet解析 (Hip OA_足関節周囲筋)
4	信号処理方法 (全波整流処理法)	19	運動力学解析 (Hip OA_COG・関節角度)
5	信号処理方法 (平滑化処理法)	20	運動力学解析 (Hip OA_床反力)
6	信号処理方法 (積分処理法)	21	運動力学解析 (Hip OA_モーメント・他)
7	信号処理方法 (フーリエ変換)	22	運動力学解析 (Hip OA_体節間力学エネルギー)
8	信号処理方法 (最大エントロピー法)	23	IEMG・WT解析 (Knee OA_股関節周囲筋)
9	信号処理方法 (wavelet変換)	24	IEMG・WT解析 (Knee OA_膝関節周囲筋)
10	wavelet変換オクターブ分析	25	IEMG・WT解析 (Knee OA_足関節周囲筋)
11	wavelet変換mother関数の選択	26	運動力学解析 (Knee OA_COG・関節角度)
12	自己相関関数とパワースペクトル	27	運動力学解析 (Knee OA_床反力)
13	相互相関関数とパワースペクトル	28	運動力学解析 (Knee OA_関節モーメント・他)
14	データ加算平均法	29	運動力学解析 (Knee OA_体節間力学エネルギー)
15	EMGと三次元動作解析データの同期方法	30	総合プレゼンテーション

【履修上の注意事項】

臨床への応用を常に意識しながら、参考文献等の予習と講義内容の復習を行うこと。

【評価方法】

プレゼンテーション発表 (100%) で評価する。

【テキスト】

講義中に配布する。

【参考文献】

講義中に適宜、紹介する。

身体運動機能支援科学演習

担当教員 肥後 成美

配当年次 1年

開講時期 通年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

授業形態 演習

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

ヒトの脳の実物に触れることで、中枢神経系のより深い、正確な理解を求める。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	ヒト脊髄のマクロ観察、スケッチ	16	顕微鏡観察（脊髄）、スケッチ
2	ヒト脊髄のマクロ観察、スケッチ	17	顕微鏡観察（延髄）、スケッチ
3	ヒト脳の髄膜と血管の観察、スケッチ	18	顕微鏡観察（延髄）、スケッチ
4	ヒト脳の髄膜と血管の観察、スケッチ	19	顕微鏡観察（橋、中脳）、スケッチ
5	大脳半球正中矢状面の観察、スケッチ	20	顕微鏡観察（橋、中脳）、スケッチ
6	大脳半球正中矢状面の観察、スケッチ	21	顕微鏡観察（間脳）、スケッチ
7	大脳半球の回、溝の観察、スケッチ	22	顕微鏡観察（間脳）、スケッチ
8	大脳半球の回、溝の観察、スケッチ	23	顕微鏡観察（小脳核、小脳皮質）、スケッチ
9	脳前頭断面、水平断面の観察、スケッチ	24	顕微鏡観察（小脳核、小脳皮質）、スケッチ
10	脳前頭断面、水平断面の観察、スケッチ	25	顕微鏡観察（大脳皮質）、スケッチ
11	脳幹表面の観察、小脳の観察、スケッチ	26	顕微鏡観察（大脳皮質）、スケッチ
12	脳幹表面の観察、小脳の観察、スケッチ	27	顕微鏡観察（大脳皮質）、スケッチ
13	脳幹横断面の観察、スケッチ	28	レポート作成
14	脳幹横断面の観察、スケッチ	29	レポート作成
15	ヒト脳のミクロ的顕微鏡観察（脊髄）	30	レポート作成

【履修上の注意事項】

顕微鏡操作に慣れて欲しい。

【評価方法】

レポート（100%）で評価する。

【テキスト】

特になし。

【参考文献】

適宜、紹介する。

身体運動機能支援科学演習

担当教員 二宮 省悟

配当年次 1年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4

【授業のねらい】

身体運動機能に関する基本的な研究方法について理解を深めるため、基礎的側面、臨床応用的側面から重要な国内・外の学術論文を題材として選択し、研究方法論を指導する。
選択した論文を理解する手段として、報知的抄録を作成し、発表並びに議論する、

【授業の展開計画】

第1回～30回

- 1) 身体運動機能に関する国内外の原著論文を検索し、抄読する。
- 2) 抄読した論文の主旨、対象者の選択、測定方法、結果、考察などを熟読し、その論文の問題点や課題についてまとめる。（抄録作成、発表用スライド作成）
- 3) 抄読した論文の研究内容を用いて発表を行い、まとめた問題点や課題についてさらに考察し、発展的な方法について考え、討論する。（プレゼンテーション&ディスカッション）
- 4) 上記過程を通して、論理的な考え方や研究の進め方などを指導し、研究デザインの方法を学ぶ。

【履修上の注意事項】

臨床への応用を常に意識しながら、参考文献等の予習と講義内容の復習を行うこと。計画性を持って、予習・復習を行うこと。

【評価方法】

プレゼンテーション発表（100%）で評価する。

【テキスト】

講義中に配布する。

【参考文献】

講義中に適宜、紹介する。

呼吸・循環機能支援科学特論

担当教員 大池 貴行

配当年次 1年

開講時期 通年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

授業形態 講義

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

内部障害に対する理学療法において、内部障害を有する者の運動能力を把握することは、単に「体力」を知ることにとまらず、定量的指標の解析によって運動制限要因や病態との関連、運動制限に至る機序について理解する必要がある。また身体活動向上について、理学療法士は内部障害者の生活を視野に入れ、運動能力向上に取り組まなければならない。当該科目では、主に呼吸障害に対する運動能力の評価から病態と運動との関係、運動制限要因とその機序、活動向上を目的とした運動療法について理解できることを目標とする。

【授業の展開計画】

週	授業の内容	週	授業の内容
1	内部障害の特性「目に見えない障害」とは	16	運動機能評価1（フィールドテスト）
2	呼吸器疾患の呼吸障害とは	17	フィールドテスト結果の解釈
3	呼吸障害に併存する循環障害	18	運動機能評価2（心肺運動負荷試験）
4	酸素搬送系障害	19	心肺運動負荷試験結果の解釈（運動耐容能）
5	呼吸と運動1（換気）	20	心肺運動負荷試験結果の解釈（運動制限）
6	呼吸と運動2（ガス交換）	21	運動機能評価3（骨格筋の血流・酸素化能）
7	呼吸障害による運動制限	22	骨格筋機能評価結果の解釈
8	循環と運動1（心機能）	23	運動負荷設定時に見落とす内部障害のリスク
9	循環と運動2（末梢循環）	24	効果的な運動負荷設定とは
10	循環障害による運動制限	25	運動能力に応じた運動時間の設定
11	骨格筋と運動1（骨格筋のエネルギー産生）	26	運動療法による生理学的変化
12	骨格筋と運動2（骨格筋の血流と酸素化能）	27	運動能力改善を身体活動量に反映させる方法
13	骨格筋機能異常による運動制限	28	内部障害における身体活動量の評価
14	日常生活における内部障害者の活動性	29	身体活動量評価結果の解釈
15	内部障害による活動性低下の要因	30	活動性向上を目的とした運動療法の課題

【履修上の注意事項】

呼吸生理学、運動生理学を学習し、本講義に臨むこと

【評価方法】

レポート（100%）で評価する

【テキスト】

講義中に配布する

【参考文献】

講義中に適宜、紹介する

呼吸・循環機能支援科学演習

担当教員 大池 貴行

配当年次 1年

開講時期 通年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

授業形態 講義

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

内部障害の運動制限要因、運動能力を捉えるにあたって、様々な運動指標の中から必要な情報を選択し、的確に解析しなければならない。またそれを基にして、適切な運動療法の実施が重要である。

本講ではシミュレーションデータを通して運動指標の解析や臨床的観点から運動処方やコンディショニングなどを理解できることを目標としている。さらに臨床における内部障害の課題やトピックを踏まえ、研究を視野に入れ、定量的指標の選択や測定方法等、各自の研究テーマの研究プロトコル確立に必要な知識、技術を修得する。

【授業の展開計画】

週	授業の内容	週	授業の内容
1	内部障害による活動制限の実態と自覚症状	16	6分間歩行テスト
2	スパイロメトリーによる運動制限の推定	17	シャトルウォーキングテスト
3	循環障害の評価	18	運動能力の解析1（運動耐容能）
4	心肺運動負荷試験（CPX）に活用する肺機能	19	運動能力の解析2（運動制限要因の特定）
5	呼吸障害の評価（フィジカルアセスメント）	20	ATポイントの設定（呼吸障害、循環障害）
6	運動制限要因に対するアプローチ	21	O ₂ kinetics 解析（呼吸障害の特性）
7	CPXプロトコル作成	22	O ₂ kinetics 解析（時定数）
8	運動能力の解析（漸増負荷法）	23	バイタル指標を用いたRecoveryの解析
9	無酸素性代謝閾値（ATポイント）とは	24	運動療法前の気道クリアランス
10	V-slope法	25	運動療法前のコンディショニング
11	ATポイント設定に関わる指標	26	運動療法1（全身持久力トレーニング）
12	DPBP設定方法、ATポイントとの関連	27	運動療法2（レジスタンストレーニング）
13	運動能力の解析（定常負荷法）	28	身体活動量の測定と指標の信頼性
14	O ₂ kinetics、運動への応答と時定数	29	呼吸障害における身体活動量の解析
15	Recoveryのバイタル指標と運動能力	30	呼気ガス分析による日常動作の解析

【履修上の注意事項】

呼吸循環機能に関する解剖学や生理学、運動生理学を学習し、本講義に臨むこと

【評価方法】

レポート（100%）で評価する

【テキスト】

講義中に配布する

【参考文献】

講義中に適宜、紹介する

身体機能予防支援科学特論

担当教員 塚本 紀之

配当年次 1年

開講時期 通年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

授業形態 講義

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

鍼灸の疾病予防効果について研究するための基礎的な考え方を身につける。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	健康観の歴史の変遷	16	加齢と鍼灸2－膝痛
2	日本の予防医学の現状と課題	17	加齢と鍼灸3－認知症
3	疾病の予防と東洋医学	18	生体防御概論
4	養生訓にみる予防医学の源泉	19	東洋医学からみた生体防御
5	生活習慣病と鍼灸1－高血圧	20	感染免疫
6	生活習慣病と鍼灸2－動脈硬化・脂質異常症	21	免疫と疾患
7	生活習慣病と鍼灸3－循環不全・冷え性	22	免疫疾患と鍼灸
8	生活習慣病と鍼灸4－糖尿病	23	炎症と再生
9	生活習慣病と鍼灸5－肥満（メタボ症候群）	24	神経と免疫
10	生活習慣病と鍼灸6－酸化ストレスと抗酸化	25	老化と免疫
11	生活習慣病と鍼灸7－疲労とストレス	26	精神神経免疫学と免疫
12	生活習慣病と鍼灸8－骨粗しょう症	27	運動と免疫
13	生活習慣病と鍼灸9－慢性疼痛	28	温泉療法と免疫
14	生活習慣病と鍼灸10－口腔環境	29	森林セラピーと免疫
15	加齢と鍼灸1－腰痛	30	まとめ

【履修上の注意事項】

【評価方法】

論文抄読のプレゼンテーション力（50%）および講義中の討論力（50%）で総合評価する。

【テキスト】

講義中に適宜紹介する。

【参考文献】

講義中に適宜紹介する。

身体機能予防支援科学演習

担当教員 塚本 紀之

配当年次 1年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4

【授業のねらい】

予防医学の東洋医学的な見方である「未病」を科学するために、基礎医学的側面、臨床応用的側面より重要な学術論文を選択し、論文の目的、方法、結果、考察、結論について抄読し、問題点について討論を行う。また、研究方法についてもマンツーマンで指導を行う。

【授業の展開計画】

(全30回)

1.～25. 文献紹介

予防医学（基礎・臨床）におけるヒトを対象とした研究論文を選択し、修士論文を作成するための基礎的なトレーニングを行う。

26～30. 研究方法の紹介および演習

細胞の染色法やフローサイトメーターの操作方法、サイトカインなどの生理活性物質の免疫学的分析法について実地指導を行う。

【履修上の注意事項】

【評価方法】

論文抄読のプレゼンテーション力（70%）と予防医学に関連する研究方法のレポート内容（30%）で総合評価する。

【テキスト】

講義中に適宜紹介する。

【参考文献】

講義中に適宜紹介する。

身体機能応用支援科学特論

担当教員 ○篠原 昭二、内田 匠治

配当年次 1年

開講時期 通年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

授業形態 講義

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

修士論文の研究テーマに関する学術論文、文献を中心に、ヒトを対象とする鍼灸臨床の研究論文を題材として扱い、論文の研究目的、方法、結果、考察などを理解し、内容を理解し、自身の研究に応用ができるようになる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	内科系疾患：循環器；高血圧（篠原）	16	外科系疾患：泌尿器；まとめ（内田）
2	外科系疾患：消化器；胃の疾患（内田）	17	内科系疾患：呼吸器感染症（篠原）
3	内科系疾患：循環器；心臓の疾患（篠原）	18	外科系疾患：運動器；肩関節疾患（内田）
4	外科系疾患：口腔から食道（内田）	19	内科系疾患：呼吸器；まとめ（篠原）
5	内科系疾患：循環器；脈管の疾患（篠原）	20	外科系疾患：運動器；腰背部疾患（内田）
6	外科系疾患：消化器；腸の疾患（内田）	21	内科系疾患：代謝性疾患；糖尿病（篠原）
7	内科系疾患：末梢循環障害（篠原）	22	外科系疾患：運動器；膝関節疾患（内田）
8	外科系疾患：消化器；肝胆の疾患（内田）	23	内科系疾患：脂質異常症（篠原）
9	内科系疾患：循環器；まとめ（篠原）	24	外科系疾患：関節疾患（内田）
10	外科系疾患：泌尿器；腎臓の疾患（内田）	25	内科系疾患：代謝性疾患；痛風（篠原）
11	内科系疾患：呼吸器；肺疾患（篠原）	26	外科系疾患：脳血管疾患の予防（内田）
12	外科系疾患：泌尿器；膀胱の疾患（内田）	27	内科系疾患：代謝性疾患；肥満（篠原）
13	内科系疾患：上気道の疾患（篠原）	28	外科系疾患：脳血管疾患急性期（内田）
14	外科系疾患：生殖器の疾患（内田）	29	内科系疾患：代謝性疾患；まとめ（篠原）
15	内科系疾患：呼吸器；慢性肺疾患（篠原）	30	外科系疾患：脳血管疾患後遺症（内田）

【履修上の注意事項】

文献についてはあらかじめ目を通して、疑問点などを把握して授業に臨むこと。

【評価方法】

レポートによる評価とする。

【テキスト】

適宜紹介する。

【参考文献】

適宜紹介する

身体機能応用支援科学演習

担当教員 ○篠原 昭二、内田 匠治

配当年次 1年

開講時期 通年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

授業形態 演習

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

修士論文の研究テーマに関する学術論文、文献を中心に、ヒトを対象とする鍼灸臨床の研究論文を題材として扱い、論文の研究目的、方法、結果、考察などを理解し、内容を理解し、自身の研究に応用ができるようになる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	授業の進め方、文献検索について（篠原）	16	泌尿器研究の方法論について（内田）
2	統計データを読む上での基礎知識（内田）	17	呼吸器研究の結果と考察について（篠原）
3	循環器疾患に関する文献収集（篠原）	18	泌尿器研究の結果と考察について（内田）
4	消化器疾患に関する文献収集（内田）	19	代謝疾患に関する文献収集（篠原）
5	循環器研究の現状について（篠原）	20	運動器疾患に関する文献収集（内田）
6	消化器研究の現状について（内田）	21	代謝疾患研究の現状について（篠原）
7	循環器研究の方法論について（篠原）	22	運動器疾患研究の現状について（内田）
8	消化器研究の方法論について（内田）	23	代謝疾患研究の方法論について（篠原）
9	循環器研究の結果と考察について（篠原）	24	運動器疾患研究の方法論について（内田）
10	消化器研究の結果と考察について（内田）	25	代謝疾患研究の結果と考察（篠原）
11	呼吸器疾患に関する文献収集（篠原）	26	運動器研究の結果と考察について（内田）
12	泌尿器疾患に関する文献収集（内田）	27	鍼灸研究の文献収集（篠原）
13	呼吸器疾患の研究の現状について（篠原）	28	鍼灸研究の現状について（内田）
14	泌尿器疾患の研究の現状について（内田）	29	鍼灸研究の方法論について（篠原）
15	呼吸器研究の方法論について（篠原）	30	鍼灸研究の結果と考察について（内田）

【履修上の注意事項】

文献についてはあらかじめ目を通して、疑問点などを把握して授業に臨むこと。

【評価方法】

レポートによる評価とする。

【テキスト】

適宜紹介する。

【参考文献】

適宜紹介する。

身体機能病態生理学特論

担当教員 齋田 和孝

配当年次 1年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 講義

単位数 4

【授業のねらい】

- (1) 炎症反応と免疫機能の基本システムについて説明できる。
- (2) ある疾患について、その成り立ちや病態形成における機序について説明できる。
- (3) 研究テーマの背景について説明できる。

【授業の展開計画】

健康な状態はホメオスタシスによって維持され、逆に、その破綻は不健康な状態を作り出していく。この過程には生活習慣の乱れや環境因子などが大きく関与し、さらに加齢という生理的かつ不可逆的な現象によって修飾される。生活習慣病や慢性の難治性疾患の発症と進展には、炎症反応と免疫反応がとくに重要な役割を演じている。この科目では、下記のように炎症反応と免疫機能を基盤とした疾患の成り立ちやその病態形成における免疫学的機序の関与について学ぶ。この過程を通して研究テーマの背景の理解を深め、根拠に基づいた疾患の予防や制御に関わる総合的な考え方を身につける。

(1) 総論：急性および慢性炎症反応、自然免疫と獲得免疫、マクロファージとリンパ球、粘膜免疫、自律神経系と免疫機能の関わりについての基本システム、および、その破綻による病理学のおよび生理学的変化について解説する。(10コマ)

(2) 各論：メタボリックシンドロームと動脈硬化、痛風、関節リウマチ、炎症性腸疾患などの疾患における免疫学的機序と病態について解説する。(10コマ)

(3) 院生の研究テーマに関連する出版物や論文を参考にして研究テーマの背景の理解を深める。(10コマ)

【履修上の注意事項】

学部で学んだ病理学の復習をしておくこと。

【評価方法】

授業中の課題や設問に対する回答内容によって「授業のねらい」各項目の習得度を判断し、(1) 30%、(2) 30%、(3) 40%として総合的に評価する。

【テキスト】

講義の進行に合わせて、適宜紹介する。

【参考文献】

「病態のしくみがわかる免疫学」編集：関修司、安保徹。医学書院
そのほか、講義の進行に合わせて、適宜紹介する。

身体機能病態生理学演習

担当教員 齋田 和孝

配当年次 1年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4

【授業のねらい】

- (1) 原著論文の内容を正しく理解し、説明できる。
- (2) 原著論文の実験内容や結果の解釈における問題点や課題について考察できる。

【授業の展開計画】

炎症反応や免疫応答に関連した生活習慣病や慢性炎症性疾患の病態生理に関するテーマを決めて論文を抄読し、その発展と研究の経緯を学び、最新情報を得る。

- (1) 大学院生各自が国内外の原著論文を検索し、抄読する。
- (2) 抄読した論文の趣旨や結果等の内容、および、その論文における問題点や課題についてまとめる。
- (3) まとめた問題点や課題を科学的に考察し、抄読した論文の研究内容をさらに充実・発展させるために必要な事項について検討する。
- (4) 以上の過程を通して、科学研究における論理的な考え方や研究の進め方、具体的な研究方法について習得する。

【履修上の注意事項】

自ら積極的に国内外の原著論文を検索し、抄読すること。とくに英文文献に積極的に取り組むこと。

【評価方法】

授業の展開計画に沿った各課題の完成度をもとに、「授業のねらい」の習得度を(1) (2)をそれぞれ50%とし、総合的に評価する。

【テキスト】

演習の進行に合わせて、適宜紹介する。

【参考文献】

演習の進行に合わせて、適宜紹介する。

鍼灸臨床特別演習

担当教員 篠原 昭二

配当年次 1年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4

【授業のねらい】

附属鍼灸臨床センターにおいて、実際患者さんを対象とした鍼灸臨床を通して、四診法、現代医学的な病態・東洋医学的な病態把握、治療方針と選経・選穴、治療効果判定、カルテ記載の一連の過程について習熟することを目的とする。特に、診断においては、臓腑病、経脈病、経筋病の判断ができるようになることが到達目標である。

【授業の展開計画】

附属鍼灸臨床センターで毎回1名以上の臨床実習の後、症例検討(カンファレンス)を行う。(全30回)

【履修上の注意事項】

患者の予約と合わせて実施するので、通年を通して不定期に授業を実施することがある。

【評価方法】

実習内容とカンファレンスの内容によって評価する。

【テキスト】

必要に応じて適宜指示する。

【参考文献】

必要に応じて適宜指示する。

鍼灸臨床特別演習

担当教員 塚本 紀之

配当年次 1年

単位区分 選択：身体機能支援科学分野

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

鍼灸臨床における高度な臨床能力を養うために、附属鍼灸臨床センターで実際に患者への治療を行い、その効果を評価し臨床実践能力を高める。座学だけの理解では身につけることができない臨床技術を実践演習することにより、より高度の鍼灸治療技術を養成する。

【授業の展開計画】

附属鍼灸臨床センターでの演習の後、症例検討を行う。（全30回）
来院した患者の主訴、病態に応じて、主に健康・予防医学的な治療（生活習慣病予防対策、疲労、ストレスなどの未病）を対象として症例検討を行う。

【履修上の注意事項】

センター演習と症例報告で合わせて30回の授業とする。

【評価方法】

患者様に対する施術能力（技術、コミュニケーション）能力と症例の分析、プレゼンテーション力について評価する。

【テキスト】

必要に応じて適宜指示する。

【参考文献】

必要に応じて適宜指示する。

鍼灸臨床特別演習**担当教員** 内田 匠治**配当年次** 1年**単位区分** 選択：身体機能支援科学分野**準備事項****備考****開講時期** 通年**授業形態** 演習**単位数** 4**【授業のねらい】**

鍼灸センターにおける実習を通して、診断、病態把握、治療技術、臨床コミュニケーションなどについて、実際に来院された患者を治療しながら直接的に教授する。学部では教えることが難しいような高度な技術についても自身でできるようになる。

【授業の展開計画】

毎回1名以上の臨床実習とカンファレンスを行う。

【履修上の注意事項】

患者の予約と合わせて実施するので、通年を通して不定期に授業を実施することがある。

【評価方法】

実習内容とカンファレンスの内容によって評価する。

【テキスト】

患者の症状に合わせて適宜紹介する。

【参考文献】

患者の症状などに合わせて適宜紹介する。

健康支援科学研究

担当教員 加藤 浩

配当年次 2年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 研究

単位数 8

【授業のねらい】

健康支援科学専攻に関する研究活動の総括として、口腔機能支援科学分野と身体機能支援科学分野に関する研究を位置づけ、修士論文の作成に係る研究指導を行う。そして、自らが設定した研究テーマについて研究を実施し、原著論文を書けるようになる。

【授業の展開計画】

第1回～20回

研究テーマを立案し、文献検索等で当該研究テーマに関する情報収集を行う。そして、仮説を提案し、その仮説を検証するための具体的研究方法を検討し研究計画書を作成する。その後、予備実験繰り返し実施し、研究計画の修正を行う。

第21回～40回

完成した研究計画に従い、本実験（データ計測及びデータ解析）を実施する。また、実験期間中は月2回程度の定期的経過報告会に参加し、他の参加者と共に互いに討論し情報交換を行うことで研究成果をまとめていく。

第41回～60回

本実験で得られたデータを整理しながら、研究論文の作成を実施する。

【履修上の注意事項】

インターネット（WEB会議システム）やE-mail等を積極的に活用した履修指導を行う。

【評価方法】

研究論文（100%）で評価する。

【テキスト】

特に指定しない

【参考文献】

適宜、紹介する

健康支援科学研究

担当教員 石川 裕子

配当年次 2年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 研究

単位数 8

【授業のねらい】

健康支援科学領域に関する研究活動の総括として、口腔機能科学に分野に関する研究を行う。

- ①科学的視点を持ち論文作成を行うことができる
- ②倫理的配慮を持ち研究をすすめることができる
- ③論理的に研究をまとめることができる

【授業の展開計画】

第1回～20回

研究テーマを立案し、文献等で当該研究テーマに関する情報収集を行う。そして、仮説を立て具体的な研究計画書を作成する。

第21回～40回

研究計画書に従い、調査もしくは実験を実施する。

第41回～60回

調査もしくは実験で得られたデータを集計し研究論文の作成を行う。

【履修上の注意事項】

E-mail等を積極的に活用した履修指導を行う。

【評価方法】

研究論文(100%)で評価する。

【テキスト】

特になし。

【参考文献】

適宜、紹介する。

健康支援科学研究

担当教員 大池 貴行

配当年次 2年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 研究

単位数 8

【授業のねらい】

健康支援科学領域に関する研究活動の総括として、口腔機能支援科学分野と身体機能支援科学分野に関する研究を位置づけ、修士論文の作成に係わる研究・指導を行う。自らが設定した研究テーマについて研究を実施し、研究論文を書けるようになる。また研究活動に必要な知識・方法論の修得については、これまでの大学院生の臨床経験や研究歴等を考慮し、問題解決能力を十二分に発揮できるよう指導する。

【授業の展開計画】

第1回～20回

研究テーマを立案し、文献検索等で当該研究テーマに関する情報収集を行う。そして、仮説を提案し、その仮説を検証するための具体的研究方法を検討し研究計画書を作成する。その後、予備実験繰り返し実施し、研究計画の修正を行う。

第21回～40回

完成した研究計画に従い、本実験（データ計測及びデータ解析）を実施する。また、実験期間中は月2回程度の定期的経過報告会に参加し、他の参加者と共に互いに討論し情報交換を行うことで研究成果をまとめていく。

第41回～60回

本実験で得られたデータを整理しながら、研究論文の作成を実施する。

【履修上の注意事項】

特になし

【評価方法】

研究論文（100%）で評価する

【テキスト】

特になし

【参考文献】

適宜、紹介する

健康支援科学研究

担当教員 金子 憲章

配当年次 2年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 研究

単位数 8

【授業のねらい】

健康支援学専攻（口腔機能支援科学分野）における、演習、特論を基盤として研究課題を決定し、その研究方法を模索し、研究方法を確立する。実験データ収集・分析を行う。修士論文作成については論文作成の流れ、執筆要領の指導を行い、学生本人が自主的に修士論文を作成できる。

【授業の展開計画】

- 1回～10回 : 研究課題を選択決定し、研究計画を立案、確立する。必要な機材・器具等を準備する。
- 11回～30回 : 実験データの収集、分析を行う。
- 40回～50回 : データの客観性の検討、論文記載のためデータ整理を行う。
- 50回～60回 : 修士論文作成、報告会の準備

【履修上の注意事項】

特になし

【評価方法】

修士論文（100%）で評価する。

【テキスト】

適宜紹介する。

【参考文献】

適宜紹介する。

健康支援科学研究

担当教員 篠原 昭二

配当年次 2年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 研究

単位数 8

【授業のねらい】

身体機能予防支援科学特論、演習での学習を基に、東洋医学的な観点から、研究テーマを設定し、研究を展開する。研究計画の立て方、データの集積と分析、必要な統計手法、論文作成等の一連のプロセスについて学ぶ。

【授業の展開計画】

年間を通じて（60回）、初年度に構築した研究計画案に沿って研究作業を主体的に行い、最終的に修士論文としてまとめる。
毎週1回の文献抄読会、月1回程度の研究中間報告会を行う。

【履修上の注意事項】

長期履修者については、研究進捗状況により、随時日程調整を行う。修士論文発表会までに、関連する学会や研究会などで研究発表を行うことが望ましい。

【評価方法】

文献抄読会、研究中間報告会など総合的に評価を行う。

【テキスト】

特に指定はしない。

【参考文献】

研究を進める上で必要な文献は学生自ら渉猟、収集する。また随時指導教員からも紹介する。

健康支援科学研究

担当教員 齋田 和孝

配当年次 2年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 研究

単位数 8

【授業のねらい】

- (1) 具体的な研究テーマを決めて実際に研究を行い、論文を作成することができる。
- (2) 科学者として現象や対象を客観的に評価することができる。
- (3) あるテーマにおける問題点を正しく認識して解決することができる。
- (4) 客観的事実を根拠として論理的に考察および説明することができる。

【授業の展開計画】

下記に沿って研究を進めていく。教員や他の大学院生との十分なディスカッションを通して指導する。

- (1) 研究テーマを決めて、研究計画書を作成する。
- (2) 資料の収集および文献検索を行い、必要な基礎知識を得るとともに、研究の背景を理解し、具体的な仮説を立てて目的を明確にする。
- (3) 研究方法を十分に理解した上で準備を行い、調査あるいは実験を行う。
- (4) 得られたデータを集計し、仮説を検証しながら分析する。
- (5) 得られた結果の意義を明確にした上で、過去の報告との比較検討も行いながら、取り組んだ研究テーマにおける課題や将来的な展開について論理的に考察する。
- (6) 以上をまとめて、修士論文を作成する。

【履修上の注意事項】

自分の研究テーマに関する学会等での最新情報を常にチェックしておくこと。

【評価方法】

研究および修士論文作成過程における「授業のねらい」の習熟度50%、修士論文の完成度50%とし、総合的に評価する。

【テキスト】

研究の進行に合わせて、適宜紹介する。

【参考文献】

研究の進行に合わせて、適宜紹介する。

健康支援科学研究

担当教員 徳永 淳也

配当年次 2年

開講時期 通年

単位区分 必修

授業形態 研究

単位数 8

準備事項

備考

【授業のねらい】

特論および演習で得た基礎知識ならびに研究領域に関する問題意識を念頭に置きながら、社会調査法や疫学的アプローチを

用いて、研究課題の決定、研究デザイン作成、調査実施、データ解析、論文執筆、等の各過程における具体的手順と考え方を修得

し修士論文作成を行う。

【授業の展開計画】

1. 問題意識とは何か、2. 問題意識の発掘、3. 問題意識の醸成
4. 研究テーマとは何か、5. 問題意識から研究テーマへ、6. 良い研究テーマとは
7. 研究テーマの具体例、8. 研究テーマと仮説設定、9. 研究テーマの検証
10. 研究テーマの決定、11. 文献レビューの意味、12. 文献レビュー方法概説
13. 文献レビューの具体例、14. 収集情報の整理法、15. 文献の批判的吟味、
16. 研究方法の位置づけ、17. 研究デザインとは何か、18. 研究デザインの検討
19. 研究デザインの決定、20. 疫学研究方法論概説、21. 社会調査法概説
22. データ測定とは、22. データの信頼性評価とは、23. 妥当性評価
24. 測定手法の検討、25. 測定手法の評価、26. 測定手法の決定
27. 調査手法の検討、28. 調査手法の決定、29. 質問紙調査の要点
30. 質的調査の要点、31. 質的調査とデータマイニング
32. 実データ収集の要点、33. データ収集方法の要点、34. 収集データの整理方法
35. 収集データのデータセットへの格納、36. データ分析とは
37. データ分析の進め方、38. 量的分析手法概説、39. 質的分析手法概説
40. 分析実施指導、41. 実施指導、単純集計、42. 実施指導、単純集計
43. 実施指導、相関分析、44. 実施指導、多変数間の分散分析
45. 実施指導、多変量解析、46. 実施指導、共分散構造分析
47. 実施指導、テキストデータ分析、48. テキストマイニング
49. 分析結果の要約、50. 結果表の作成、51. 論文執筆と構造理解
52. 論文執筆、緒言、53. 論文執筆、対象と方法、54. 論文執筆、結果
55. 論文執筆、考察、56. 論文執筆、文献の効果的な引用、
57. 論文執筆、仮説の検証、58. 論文執筆、抄録作成方法
59. 効果的なプレゼンテーション、60. 調査結果の還元

【履修上の注意事項】

研究スケジュールに沿ってできるだけ計画的にデータ解析・論文作成を行うために、毎週の研究指導時間を有効に活用し問題点の整理、分析を着実に進めること。

【評価方法】

修士論文作成過程を50%、修士論文を50%の割合で評価する。

【テキスト】

適宜紹介する。

【参考文献】

適宜紹介する。

健康支援科学研究

担当教員 肥後 成美

配当年次 2年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 研究

単位数 8

【授業のねらい】

健康支援科学専攻に関する研究活動の総括として、身体機能支援科学分野に関する研究を位置づけ、修士論文の作成に係る研究指導を行う。問題点の抽出、解決法を見出し、研究テーマについて論理的思考の基、論文を仕上げることを目指す。

【授業の展開計画】

大まかな目安として、

- 1-10回 : 研究テーマの決定、研究計画、必要な準備などを立案する。
- 11-30回 : 実験の所見取り、データ解析を行う。
- 31-50回 : 修士論文の作成を行う。
- 51-60回 : 論文内容の討論、文章の修正、報告会の練習など。

【履修上の注意事項】

特になし

【評価方法】

研究論文(100%)で評価する。

【テキスト】

特になし

【参考文献】

適宜、紹介する。

健康支援科学研究

担当教員 塚本 紀之

配当年次 2年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 研究

単位数 8

【授業のねらい】

身体機能予防支援科学特論、演習での学習を基に、鍼灸による疾病予防と健康増進に焦点をあて、主として免疫生物化学的研究手法を用いて研究を展開する。

【授業の展開計画】

年間を通じて60回の授業において、研究計画書に沿って実験計画、実験準備、実験、データ収集、データ分析を主体的に行い、最終的に修士論文としてまとめる。この過程において、毎週1回の文献抄読会（Journal Club）、月1回程度の研究進捗状況報告会（Progress Report）に参加し、他の参加者とともに互いに討論を行うことによって研究をまとめていく。

【履修上の注意事項】

長期履修者については、研究進捗状況により、随時日程調整を行う。修士論文発表会までに、関連する学会や研究会などで研究発表を行うことが望ましい。

【評価方法】

文献抄読会、研究進捗報告会など総合的に評価を行う。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献】

研究を進める上で必要な文献は学生自ら収集する。また随時指導教員からも紹介する。

健康支援科学研究

担当教員 二宮 省悟

配当年次 2年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 通年

授業形態 研究

単位数 8

【授業のねらい】

健康支援科学専攻に関する研究活動の総括として、口腔機能支援科学分野と身体機能支援科学分野に関する研究を位置づけ、修士論文の作成に係る研究指導を行う。そして、自らが設定した研究テーマについて研究を実施し、原著論文を書けるようになる。

【授業の展開計画】

第1回～20回

研究テーマを立案し、文献検索等で当該研究テーマに関する情報収集を行う。そして、仮説を提案し、その仮説を検証するための具体的研究方法を検討し研究計画書を作成する。その後、予備実験を繰り返し実施し、研究計画の修正を行う。

第21回～40回

完成した研究計画に従い、本実験（データ計測及びデータ解析）を実施する。また、実験期間中は月2回程度の定期的結果報告会に参加し、他の参加者と共に互いに討論し情報交換を行うことで研究成果をまとめていく。

第41回～第60回

本実験で得られたデータを整理しながら、研究論文の作成を実施する。

【履修上の注意事項】

インターネット（WEB会議システム）やE-mail等を積極的に活用した履修指導を行う。計画性を持って学習すること。十分に予習・復習すること。

【評価方法】

研究論文（100%）で評価する。

【テキスト】

特に指定しない

【参考文献】

適宜、紹介する